

本の情報

詳細は [GitHub Repository](#) をご覧ください。

『謙遜』前書き

私たちが謙遜へと強く促す動機はおもに三つあります。謙遜は、被造物として、罪人として、聖徒としてふさわしいものです。第一の動機は、天の軍勢のなかに、墮落前の人間のなかに、人の子としてのイエスのなかに見られます。第二の動機は、私たちの墮落した状態を直視させられ、私たちが被造物として正しい場所に戻ることでできる唯一の道を指摘されることによります。第三の動機には恵みの神秘があります。それが私たちに教えてくれるのは、私たちが贖いの愛の計り知れない素晴らしさに酔いしれるとき、謙遜こそが私たちにとって永遠に続く祝福と礼拝を完成させるものにあるということです。

私たちが教会で日頃受けている教えでは、もっぱら第二の点ばかりが強調されてきました。その結果、謙遜をじっさいに維持しようとするには罪を犯し続けなければならない、と極端なことを言う人までいる始末です。また他方では、自己卑下の深さが謙遜の秘訣であると思っている人もいます。そのため、クリスチャンライフは損害を受けてきました。信者が正しく指導されてこなかったことは疑いようありません。被造物としての私たちと神との関係を見ても、神にいっさいとになっていただくために自己を無にすることほど、自然で、美しく、祝福されている行為はほかにないということを理解できるよう教えなければならなかったのです。あるいは、罪ではなく恵みこそが、謙遜に至らせる最も効果的なものであるという点が明らかにされてきませんでした。また、たましいがその罪の性質を経由して、神のご支配、すなわち神としての、創造主としての、贖い主としての素晴らしい神の栄光による占領に導かれるときにこそ、本当の意味で神の御前で最も低きにくだるといふ点が明らかにされてきませんでした。

これらの考察において、複数の理由から、とりわけ被造物としての私たちにふさわしい謙遜に、私の関心はまっすぐに向かっています。その理由は、謙遜と罪とのつながりが私たちの教会の教えであらゆる機会に申し分なく説かれているからだけでなく、満ち足りたクリスチャンライフを送るためには他の側面にスポットライトを当てることがどうしても避けられないと私は信じているからです。もしイエスをご自分のへりくだりにおいて私たちの模範となりうるのなら、私たちはそのへりくだりの原則を理解する必要があります。その原則のなかに、へりくだりの根拠があります。その原則のな

かに、私たちがキリストと共に立てる共通の土台を見い出します。またその原則に従って、私たちがキリストに似た者とされることが得られます。もし謙遜が私たちの喜びとなりうるのなら、謙遜は罪のゆえの恥の印であるというだけでなく、あらゆる罪を別にしても、ほかでもないイエスの天的な美しさと祝福でこの身を覆われることです。私たちが理解すべきなのは、イエスがご自分を仕える者の姿とされた事実に栄光を見出されたのと同じように、私たちにも単純な真理を教えてくださいました。「だれでもあなたがたのうちで一番になりたい者は、仕える者になりなさい」とイエスが私たちに言われたとき、すべての人に仕え、助ける者となることほど天的な神のご性質を現すものはほかにないという、祝福された真理を教えてくださいました。忠実なしもべは自分の分をわきまえているので、主人や客の欲するものを給仕することに本当の喜びを見出します。謙遜が罪の意識と比較にならないほど無限に深いものであると知り、またイエスのいのちに参与することであるという事実を受け入れるとき、謙遜こそが本当の高潔さであるという真理を私たちは学び始めるでしょう。また、すべての人のしもべとなることによって謙遜をはっきり示すことは、神のかたちに造られた人間としての私たちの運命を最も高い次元で実現するというのもわかるでしょう。

私自身の宗教的経験を振り返ると、また世界中のキリスト教会をぐるりと見渡したとき、イエスの弟子たる際立った特徴として謙遜が求められる機会がなんと少ないかという思いに至って愕然とします。説教と生活において、家庭生活と社会生活の毎日の交流において、とくにクリスチャンとの特別な交わりにおいて、キリストのための働きの指針と実行において。ああ！ 謙遜を、恵みが成長するための唯一の根として、イエスとの本当の交わりに入るための避けられない条件の一つとして、最も大切な徳として評価されていない証拠がどれほどたくさんあるでしょうか。より高い聖性を求めていると主張する人々に対して、そう公言するわりに謙遜の成長が伴っていないではないかと言うことがもとより可能であったなら、そのことはすべての熱心なクリスチャンに向けて声を大にして語られた召しです。その非難に含まれる真実が多いにせよ少ないにせよ、柔和でへりくだった方なる神の小羊に付き従う者たちが身につける主な記章が、心の柔和とへりくだりであるということを示さなければなりません。

(一) 謙遜: 被造物の栄光

「彼らの冠を御座のまえに、投げ出して言った、「われらの主なる神よ、あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました。御旨によって、万物は存在し、また造られたのであります」(黙示録四・一〇～一一) 神が宇宙を創造なさったとき、被造物を神の完全性と祝福にあずかる者とし、そうして宇宙のなかに神の愛と知恵と力との栄光をあらわすという一つの目的がありました。神は造られた者たちの内に、また造られた者たちを通して、おのおのが受けられる器の大きさに応じて神ご自身の良きご性質と栄光を転移することによって、ご自身をあらわすことを願われました。

けれども、この転移は、被造物が自分自身の内に所有できるものを与えることではありません。被造物の側で自由に管理したり使ったりできるような種類のいのちと良き性質を与えることではありません。絶対にありえません。そうではなく、神が永遠に生きておられ、永遠に存在され、永遠に働いておられる方であって、その方がすべてのものをご自分の力あるみことばによって保ち、その方の内にすべてのものが存在しているのですから、被造物の神に対する関係は、絶えざる、絶対的な、普遍的な依存という関係しかあり得ないのです。

神が御力によってひとたび創造したことが真実であるのと同じように、神は瞬間ごとと同じ御力によって被造物を保っておられることも真実です。被造物は存在の起源とはじまりに立ち返らなければならないだけでなく、その起源においていっさいを神をよりどころとしていることを認めなければなりません。すなわち、被造物の主要な関心、その最も崇高な徳、その唯一の幸福は、今から永遠にわたって、それ自身を空の器として捧げることです。神がそのなかに住まい、御力と良きご性質をあらわすことができるからです。

神の付与するいのちは一度にすべての者に分配されたのではなく、全能の御力の絶えざる働きかけによって、そのつど、持続的に与えられています。神にまったくより頼む謙遜という場所は、被造物の本来的な性質に由来します。それは、第一の義務であり、被造物の最も崇高な徳であり、すべての徳の根です。

ですから、高ぶり、すなわちこの謙遜の欠如はあらゆる罪と悪の根です。現在の墮落天使が不従順に陥って天の光から外の闇へと追放されたのは、独りよがりな自己賞賛を始めたときでした。それと同じように、へびが私たちの最初の先祖に神のようになりたいと願う高ぶりの毒をささやきかけたとき、彼らも高い地位から現在の人類が沈んでいる悲惨さへと落ちました。天においても地においても、高ぶり、すなわち自分を高めることは、地獄の門であり、地獄の誕生であり、地獄の呪いです。(章末ノート一参照)

したがって、私たちの贖いとは、失われた謙遜を回復すること、被造物の神に対する本来のただ一つの真実な関係を回復すること以外の何ものでもありません。ですからイエスが来られた目的は、地上に謙遜を取り戻すため、私たちを謙遜にあずからせるため、それによって私たちを救うためです。天においてイエスをご自分を低くされて人間となられました。私たちがキリストの内に見ている謙遜が、天においてはキリストを保っていました。謙遜がキリストを天から下らせ、キリストが謙遜を天から下せました。この地上で「ご自分を低くして、死に至るまで従順となられた」のです。キリストの謙遜が彼の死に徳を与え、それゆえ私たちの贖いとなりました。いまやキリストの分け与える救いとはキリストご自身のいのちと死、キリストご自身のご性質と霊、キリストご自身の謙遜を転移させること以下のもではなく、それ以外のものでもありません。キリストご自身の謙遜はキリストの神に対する関係と彼の贖いのわざの、土台であり、根です。イエス・キリストが完全な謙遜の生涯によって、被造物としての人の運命を私たちの代わりに実現してくださいました。キリストの謙遜は私たちの救いです。キリストの救いは私たちの謙遜です。

それですから、救われた者たちの生活、聖徒たちの生活には、罪から解放され、神との関係、人との関係のすみずみにまで謙遜が浸透している本来のありさまを十二分に回復したというこの刻印がぜひとも押されなければなりません。このことを差し置いて、神の臨在に本当の意味でとどまることや、神の恵みや御霊の力を経験することはありえません。このことを差し置いて、信仰や愛や喜びや強さがやどることはありません。謙遜は、恵みが根をはる唯一の土壌なのです。どんな敗北も失敗も、謙遜が欠けているならそのことが十分な説明となります。謙遜は他の恵みや徳と同列に並べられるものではありません。それはすべての根です。なぜなら、それだけが神の御

前に正しい態度をとり、神が神としてあらゆることをなさるのを妨げないからです。

神は私たちを理性的な存在に造ってくださったので、私たちはある命令についてその本質を洞察し、その命令の絶対的な必要性を真に理解すればするほど、ますます自ら進んで、心から従うようになります。教会のなかで謙遜への召しがあまりにも軽く見られてきました。というのも、その本質と重要性が理解されてこなかったからです。謙遜は私たちが神に捧げるものではなく、神が与えてくださるものです。それは単純に「まったく無に等しい者」であるという感覚です。その感覚は、神こそがすべてであるという真実をはっきりと理解するときに与えられます。私は無であるという感覚が、神にすべてとなっていていただく道を作ります。謙遜こそが本物の高貴さであることを被造物が認識するとき、また被造物が神のいのちと栄光が働き、それらをあらわすための形であり器であることに自らの意志、思い、愛をもって彼自身が同意するとき、彼は謙遜を本当に理解するようになります。謙遜は被造物としての身の丈に関する真理をシンプルに認めることであり、もともと神の場所であったものを神に明け渡すことなのです。

熱心なクリスチャンが自分たちは聖性を重んじていると公言しているなら、彼らの生活がほんとうにその通りかどうかを確かめるいちばんの証拠が謙遜であるはずで、そんなはずはない、とよく言われます。ひとつの理由には、教会の教えと模範のなかに、謙遜が最高の重要性という本来あるべき場所に置かれてこなかったからではないでしょうか。また、このことは次のような真理が無視されてきたことにも理由があります。すなわち、罪の力が強いほど謙遜への動機も強くなることは事実ですが、それよりもはるかに広く力強い影響力があるということです。その力が御使いたちを、イエスを、天にいる最もきよい聖徒たちを謙遜にします。神が自由にすべてとなったださるままに神にお任せする謙遜と「無なること」こそが、被造物の関係をあらわす第一にして主要なる表徴、彼が祝福を受けたものであることを示す奥義なのではないでしょうか。

私は確信しています。多くのクリスチャンがこの点について私自身とほとんど同じような経験をしてきたと告白するでしょう。つまり、私たちは長いあいだ主を知るうえで重要な点を取り逃してきました。心の柔和さとへりくだりが、弟子が師のものであるこ

とを裏付ける際立った特徴であるという点です。さらに、この謙遜はそれ自身から来るものではなく、特別な願いと祈りと信仰と実践の目標とされなければならないという点です。私たちがみことばを研究すると、イエスが弟子たちにこの点についてどれほど明確にまた何度も繰り返して教えておられたか、そして弟子たちが主の言われることを理解するのがどれほど遅かったことかを理解するようになります。私たちの考察のまさしく序章において、ぜひ認めようではありませんか。高ぶりほど、人間にとって自然なものはほかになく、私たちの目に隠れてじわじわと広がるものはほかになく、困難で危険なものはほかになくということ。ぜひ実感しようではありませんか。確固たる意志をもって神とキリストを忍耐強く待ち望むことほど、私たちに謙遜の恵みがどれほど不足しているかを痛感させるものはほかになく、また私たちが探し求めるものを獲得するのにどれほど無力であるかを痛感させるものはほかになくということ。キリストの人格をぜひ深く研究しようではありませんか。私たちのたましいが彼のへりくだりに敬服しそれを慕い求める愛で満たされるまで。そして、ぜひ信じようではありませんか。私たちが自らの高ぶりの思い知らされて打ちひしがれ、それを自分で打ち砕く能力もないと悟るとき、イエス・キリストご自身が入って来られて、私たちの内側にくださる彼の驚くべきいのちの一部として、この恵みをも分け与えてくださるということ。

ノートー 「要するに、高ぶりがいと高き天使を悪魔へと墮落させ、謙遜が墮落した人間を御使いの座に引き上げると永遠の領域において知らされているということです。それゆえ、次のことは墮落天使の王国から新しい創造を起こそうとしておられる神の偉大な目的です。この目的のために、墮落天使の火と高ぶりと、神の小羊の謙遜との戦争状態が続いています。その目的とは、終わりのラツパが、悪は高ぶり以外に起源を持たず、謙遜以外に終わりを持ち得ないという偉大な真理を、永遠の深みから告げ知らせるということです。真理は次の通りです。高ぶりがあなたの内で死ぬのであれば、天にある何ものもあなたの内に生きることはできない。真理の旗印のもとで、あなた自身を聖なるイエスの柔和でへりくだった霊に捧げなさい。謙遜は種をまかなければなりません。そうでないと天での収穫がありません。高ぶりをただの無作法な感情と見なしたり、謙遜をただの立派な徳と見なしたりしてはいけません。なぜなら、一方は死ですが他方はいのちであり、一方はまったくの地獄ですが他方は

まったくの天だからです。あなたが自分の内側に高ぶりを保持している限り、墮落天使があなたの内で生きています。あなたが本当の謙遜を持っているなら、神の小羊があなたの内側にそれだけ豊かに住んでいてくださいます。高ぶりが頭をもたげるとあなたのたましいに何をもたらすかわかりますか。通りかかるすべての者に、毒蛇を私から引きちぎってくださいと懇願したくなるでしょう。そのために手や目を失っても構わないとさえ思うでしょう。謙遜が、どれほど甘美で、神聖な、物事を変える力を持っているかわかりますか。それがいかにしてあなたの性質をむしばむ毒を排し、あなたの内に神の御霊が生きる余地を作り出すかわかりますか。あなたは誰か一人の足台になるよりは、むしろ全世界の足台になりたいとさえ願うようになるでしょう。』『祈りの霊』
第二集 七三ページ モレトン編 カンタベリー 一八九三

(二) 謙遜:贖いの奥義

「キリスト・イエスも抱いておられるのと同じ思いをあなたがたの内に持ちなさい。キリストはご自分をむなしくし、しもべの形をとり、ご自分を低くされ、死に至るまで従順になられた。それゆえ神はこの方を高く上げた。」(ピリピ二・五～九一部略)

どんな木も成長するための根がなければ育ちません。木はその寿命を全うするまで、はじめに芽を出した種のなかにもともとあった生命によって生きていられるだけです。この真理を第一のアダムと第二のアダムに適用しましょう。そのことを十分に理解するなら、私たちはイエスのなかにある贖いの必要性和その性質とを理解するうえで大いに役立つに違いありません。

贖いの必要性について。古い蛇が天から落とされたのは、高ぶりのゆえでした。彼の悪魔としての全性質は、高ぶりです。蛇が誘惑の言葉をエバにささやいたとき、これらの言葉にまさしく高ぶりという地獄の毒も含まれていました。エバがそれを聞き、善も悪も知っているにもかかわらず、自分の願いと意志とを「神のようになれる」という幻想に捧げたとき、その毒が彼女のたましいと血といのちとに注入され、その結果、あの祝福に満ちた謙遜と神への信頼は永遠に破壊されました。謙遜と神への信頼こそが私たちのとこしえの幸福だったのです。それらを享受することはかなわず、エバのいのちと彼女から始まる人類のいのちは、あらゆる罪とあらゆる呪いの中でも最悪のものであるサタン自身の高ぶりという毒を受け、まさしく根の部分から腐りました。この世界にうずまくあらゆる悲惨さ、国々のあいだのあらゆる戦争と流血、あらゆる自己中心性と苦しみ、あらゆる野望と嫉妬、日々の不幸に伴うあらゆる心の痛みと人生の悲痛、それらすべての起源は、この呪われた、地獄の高ぶりが私たちにもたらした結果にあります。自分自身の高ぶりであっても他者の高ぶりであっても同じことです。高ぶりこそが贖いの必要性を証明しています。私たちは何にもまして、高ぶりから贖われる必要があります。ですから、私たちの存在に食い込んだ最悪の性質について知れば知るほど、贖いの必要性に関する洞察は深まっていくでしょう。

どんな木も成長するための根がなければ育ちません。サタンが地獄から持ち込んで人間のいのちに植えつけた力は、毎日、毎時間、世界のいたるところで力強く働いています。人類はその力に苦しめられています。それを恐れ、それと戦い、それから逃

げ出します。しかし、人類はそれがどこから来るのか知りません。それがどこからおぞましい主権を発揮しているのか知りません。どこで、またどのようにすればそれを克服できるのか知りません。そのような状態にあることは疑いようがありません。高ぶりにこそ、私たちの外側からも内側からも攻める、おぞましい霊的力の根源があります。高ぶりを私たち自身の問題として告白し、嘆き悲しむことが是が非でも必要であるのと同様に、高ぶりの起源がサタンであることを知ることも必要です。それを知ることによって、どうあがいても自力でその力を克服することも振り払うこともできないという絶望へと導かれるなら、もう間もなく、私たちの解放を見出しうる、唯一の超自然な御力へと導かれるでしょう。それは、神の小羊の贖いです。私たちの内にある、自我と高ぶりの活動に対する格闘は勝機が見込めないうえ、その背後に闇の力があると考えるとますます絶望的になるかもしれません。まったくの絶望に至ってから、ようやく私たちの外にもあった力といのち、さらには天的な謙遜の存在に気づき、受け入れることができるようになります。その力もいのちも謙遜も、神の小羊が天から下され、近くに置いてくださったものです。それらによってサタンと彼の高ぶりを追い出すことが可能になります。

どんな木も成長するための根がなければ成長できません。最初のアダムとその墮落に目をやって、私たちの内に働く罪の力を知ることは確かに必要です。しかし、第二のアダムと私たちの内にいのちのある謙遜を与える彼の御力もよく知る必要があります。高ぶりの力が私たちの内に活動してきたのと同様に、謙遜のいのちは私たちの内でありありと、永続的に、圧倒的な力をもって働きます。 私たちがアダムから、アダムのなかにあったいのちを受けたことは真実ですが、それと同じように、いやそれ以上に、私たちがイエスから、イエスのなかにあるいのちを受けることは真実です。私たちは「イエスに根ざし」「神の力でからだ全体が成長するためのかしらにしっかり結びついて」歩むことができます。 受肉において人間の性質のなかに吹き込まれた神のいのちこそが、私たちが依拠し、そこから育つことのできる根です。イエスを受肉させ、さらに復活させたのと同じ大能の御力が、私たちの内に毎日働いています。ただ一つ必要なことがあります。キリストの内に啓示されたいのちが今や私たちのものとなったのですから、残るは私たちの身も心もそのいのちに所有されご支配を受けることについて、私たちの側の承諾が待たれるばかりであるということ、学び、知り、信じな

ければなりません。

この観点のなかに、想像をこえた重要な点があります。それは、キリストが何者であるか、イエスをキリストたらしめている本質は何か、特にキリストの人格の何が核であるか、すなわち何が私たちの贖い主として彼の人格の本質となり根源となっているかを正しく理解すべきであるという点です。この問いに対し、唯一の解答があります。それがキリストの謙遜です。受肉とは、キリストがご自分をむなしくして人となられたという、キリストの天的な謙遜でなくていったい何でしょうか。キリストの地上での生涯は謙遜そのものでなくていったい何でしょうか。キリストはしもべの形をとられたのです。また、キリストの贖いのわざは謙遜そのものでなくていったい何でしょうか。「彼はご自分を低くして死に至るまで従順になりました。」さらに、キリストの昇天と栄光とは、謙遜ゆえに王座に引き上げられ栄光の王冠を受けたことでなくていったい何でしょうか。「彼はご自分を低くした。それゆえ神は彼を高く上げた。」キリストが父と共に天におられたこと、またキリストの誕生、その生涯、その死、その王座への着座、そのすべてが謙遜以外の何ものでもありません。キリストは神の謙遜を人間の性質のなかに具現化なさった方です。永遠の愛である方がご自分を低くされ、柔和と温和を身にまとして、私たちを勝ち取り、私たちに仕え、私たちを救うために来られました。神の愛と謙遜ゆえに、神ご自身がすべての者の援助者、助け主、仕える者にならざるをえなかったと同じように、イエスが受肉した謙遜となられたことは必然でした。今も、キリストは柔和でへりくだった神の小羊として王座に着いておられます。

この謙遜が根の部分であるなら、その性質は枝にも葉にも実にも、木の末端にまで宿っていなければなりません。もし謙遜が第一のもの、つまりあらゆる恵みを内包したイエスのいのちの恵みであるなら、またもし謙遜が彼の贖いのわざの奥義であるなら、私たちの側がこの恵みを第一としているかどうか、私たちが主をあがめるに際し主のご謙遜を第一にほめたたえているかどうか、私たちが謙遜を第一に求めているかどうか、ほかの何を犠牲にしても謙遜を求めているかどうか、私たちの霊的生活の健康と力強さが全面的にかかっています。(章末ノート二参照)

クリスチャンライフが弱々しく実りないものになることがあまりに多いといっても、キリストのいのちの根を無視し、知らないままであれば、何の不思議があるのでしょうか。

救いの喜びがあまりにも小さいといっても、キリストがその中に喜びを見出し、その中に喜びをもたらした当のものをほとんど求めていなければ、何の不思議があるでしょうか。謙遜は、自己が完全な終局と死を迎える場所に宿ります。謙遜は、イエスにならって人からの栄誉をまったく願わず、ただ神から来る栄誉だけを求めます。謙遜は、ただひたすら自分自身を無に等しい者と見なし、神にすべてになっていただきます。主だけが高められるためです。そして、このような謙遜が、私たちがどんな喜びにもまさってキリストの内に求めるものとなり、どんな代価を払っても歓迎するものとならない限り、キリスト教が世界を征服する望みはほとんどありません。

ひょっとすると読者は、あなたの内側にも外側にもある謙遜の欠乏に特別な注意を払ったことがないかもしれません。そこで、読者の皆さんに私は心から懇願します。どんなに熱心に懇願しても足りません。主の御名によって呼ばれる者たちの内に、神の小羊の柔和で謙遜な霊を、豊かに見出したことがあるかどうか立ち止まって自問してください。考えてみましょう。以下のすべてのものの根が、高ぶりにほかならないということ。すなわち、愛の欠乏、ほかの人の必要や感情や弱さに対する無頓着、公然と正直に言っているのだからという弁解のもとに正当化される容赦なき速やかな裁きと断罪、怒りと不安といらだち、苦々しい思いと仲たがいとといったさまざまなものです。高ぶりは自分が自分がと要求し続けます。それらが高ぶりを根としていると気づくなら、あなたの目は開かれて真実を見るようになるでしょう。どのようにして暗闇が、つまり悪魔的な高ぶりが、ほとんどあらゆる場所に忍び寄るかを理解するでしょう。聖徒の集まりも例外ではありません。問いかけ始めましょう。もしあなたの内側も外側も、また信仰の仲間や世界に対しても、信徒が本当にイエスの謙遜に絶え間なく導かれるようになったとしたら、どんな影響があらわれるでしょうか、と。また、こう言ってみましょう。私たちが心の底から、日夜、「ああ、私の内側も外側もイエスの謙遜で満たしてください!」と叫び求めるべきではないのでしょうか、と。あなたの心を率直に、あなた自身の謙遜の欠乏にたゆまず向けましょう。謙遜はキリストの生涯に似た者となることにおいて、またキリストの贖いの性格全体において、啓示されてきたものです。あなたの心を謙遜の欠乏に向けるなら、あなたはキリストご自身とキリストによる救いが何であるのかを本当の意味では知ってこなかったと感じ始めるでしょう。

信じる方よ! イエスの謙遜を研究してください。これは奥義です。あなたの贖いの

隠された根です。日ごとにその奥義にますます深く思いを沈めてください。心を尽くして信じてください。神があなたに与えてくださったこのキリストが、神としての謙遜をあなたのために働かせてくださったように、あなたの内側にも入ってきて働いてくださることを。そうして、父なる神があなたをみこころにかなう者に変えてくださるということ

ノート二「私たちは二つを知る必要がある。(一)私たちの救いとは、私たちが生まれながらに持っている私たち自身から救われるということから、その全体が成り立っている。(二)事の本質からして、言葉で言い表せないほどの神の謙遜のほか、何ものもこの救いや救い主になることはできない。したがって、救い主が墮落した人間に対して最初に発する不変のことばは、こうである。「人が自己を否定するのでなければ、彼はわたしの弟子となることはできない。」自己は墮落した性質によって全体が悪に染まっている。自己否定とは私たちが救われるための資格である。謙遜が私たちの救い主である。……自己は根である。枝である。木である。私たちの墮落した状態によってすべてが悪になっている。墮落した天使と人類の諸悪は、自己の高ぶりによって誕生した。一方で、天的ないのちの徳は、そのすべてが謙遜の徳である。天国と地獄を越えられない分け目となっているのは、ただ謙遜の有無だけである。では、永遠のいのちを獲得するための大いなる格闘とは何であり、またそこに何があるのだろうか。そこにあるいっさいは高ぶりとへりくだりの闘争である。高ぶりとへりくだりが二つの陣営の勢力である。二つの王国が人間に対する永遠の所有権を巡って争っている。謙遜にはただ一つのものしかなかった、またこれからもないであろう。それはただ一つのキリストの謙遜である。人が彼のいっさいをキリストからいただかない限り、高ぶりと自己が彼のいっさいを握っている。それゆえ、人が良き戦いをするためには、その格闘が次のようなものでなければならない。すなわち、アダムから続いている自己を偶像とする性質が、彼にいのちをもたらすキリストの超自然的な謙遜によって、死へと葬られるような格闘である。」(ウィリアム・ロウ『聖職者たちへの講演』五二ページ)

この聖霊についてのロウの本が、いずれ私の出版社から出版されることを私は期待している。

(三) イエスの生き方における謙遜

「わたしはあなたがたのあいだで仕える者のようにしています。」(ルカ二二・二七)

ヨハネの福音書には私たちの主イエスの内面生活が明らかにされています。イエスはよくご自分と父との関係や、ご自分の向かっている目的や、ご自分の活動に働く御力と霊をどう認識しているかについて語られました。謙遜という単語こそ出てきませんが、ヨハネの福音書ほどキリストの謙遜を雄弁に語っている書は他に見当たりません。すでに言ったことですが、この恵みは、神にすべてになっただくという単純な真理以外のどこにもありません。その真理のゆえに、被造物は神が働いてくださるみわざだけに自分自身を明け渡すようになります。イエスの内に私たちが見るものは、イエスが天にいます神の独り子として、かつ地上の人間として、いかに完全な従属という立場をとられ、いかにご自分に属する誉れと栄光を神にお返ししたかです。ですから、イエスが何度も教えてくださったさとしはご自分にとっても真実でした。「自分を低くする者は、高くされる。」またこう書いてあるとおりです。「この方は自分を低くした。それゆえ、神はこの方を高く上げた。」

私たちの主が、ご自分と父との関係について語ったことばを聞きましょう。主がどんなに絶え間なく「ない」「何もない」ということばでご自分を表現しておられるでしょうか。パウロは「私ではなく」と自分とキリストとの関係を表現しましたが、それはキリストがご自分と父との関係について表現なさるときの精神とちょうど同じです。

「子は自分からは何もすることができない」(ヨハネ五・一九)

「わたしは、自分自身からは何もすることができない。わたしのさばきは正しい。なぜならわたしが自分自身の意志を求めていないからである」(ヨハネ五・三〇)

「わたしは人からの栄光を受けない」(ヨハネ五・三〇)

「わたしが来たのは、自分の意志を行うためではない」(ヨハネ六・三八)

「わたしの教えはわたしのものではない」(ヨハネ七・一六)

「わたしは自分から来たのではない」(ヨハネ七・二八)

「わたしは自分からは何もしない」(ヨハネ八・二八)

「わたしは自分から来たのではなく、神がわたしを遣わしたのである」(ヨハネ八・四二)

「わたしは自分の栄光を求めない」(ヨハネ八・五〇)

「わたしが話すことばは、自分から話しているのではない」(ヨハネ一四・一〇)

「あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではない」(ヨハネ一四・二四)

これらのことばが私たちに明らかにしているのは、キリストの生き方と働きの最も深い根です。これらが伝えているのは、全能の神がキリストを通じて力強い贖いのわざをすることができたのはいったいどのようにしてなのかです。これらが示しているのは、キリストが父なる神の御子としてふさわしい心をどんなものと考えておられたかです。これらが教えてくれるのは、キリストがかつて成し遂げられ、今伝えてくださっている贖いに関して、何が本質であり、いのちであるのかです。すなわち、こういうことです。キリストが無に等しい者となられたので、神がすべてになってくださった。キリストは心尽くし力を尽くして、ご自分の内に働かれる父なる神に余すことなくご自分を明け渡しました。主ご自身の力にも、主ご自身の意志にも、主ご自身の栄誉にも、すべての働きと教えを担う主の使命全体にも、主の語られたあらゆることばにも、「私」がありませんでした。わたしは何者でもない。わたしは御父の働きのために自分を与える。わたしは何者でもない。御父こそがすべてである、と。

全面的な自制の生き方こそ、そして父なる神のみこころに対する絶対的な従順と信頼の生き方こそ、完全な平安と喜びの一つであるとキリストは心得ておられました。キリストは神にすべてを差し出しましたが、そのことによっては何一つ失いませんでした。神が彼の信頼をたたえ、彼のためにすべてのことをなしてくださいました。そればかりか彼を栄光のうちにご自分の右の手にまで引き上げてくださいました。キリストがそのように神の御前にご自分を低くし、神もいつでもキリストの御前におられましたから、キリストは人の前でもご自分を低くし、すべての人に仕える者となることが可能であると感じました。キリストの謙遜は、単純にご自分を神に明け渡すことでした。みこころのままに神が彼のうちになさることをさし許すことでした。周りの人々が彼

のことを何と言おうと、あるいは何をしよう関係ありませんでした。

キリストの贖いに徳と有効性があるのは、この心、この霊、この思いにおいてです。私たちがキリストにあずかる者とされるのには、こうした思いを私たちの内に与える目的があります。私たちの救い主が招いておられるのは、この真実な自己否定です。また、からの器に神が満たしてくださるのでなければ、自分自身の内には何の良いものもないという認識です。そして、自分が何者かである、あるいは何事かをすることができるという自己主張が、一瞬たりともさし許されていないという認識です。神がすべてになってくださるのは、すべてに先立ち、すべてに優先して、自分は何者でもなく自分からは何もすることができないという認識において、私たちがイエスと一致するときなのです。

ここに本当の謙遜の根源と本質があります。私たちの謙遜がうわべだけで貧弱なものになっているのは、このことが理解されておらず、探求されていないからなのです。イエスから、どんなに彼が柔和でへりくだった心の持ち主であったかを学ばなければなりません。本当の謙遜がどこから生まれて、どこにその力の源泉があるのかをイエスは教えてくださっています。すべてにおいてすべての働きをしておられるのは神であると知ること、私たちが自分からは何者にもなれず何もすることができないと心から同意し、私たちの場所を完全な委任と信頼をもって神にゆだねるべきであると知ること、そこに源泉があります。これが、キリストが分け与えてくださった生き方です。キリストが来られたのはそれを明らかにするためです。罪に対して死に、自己に対しても死ぬことを通じて神に向かう生き方です。この生き方が私たちにはあまりにも高く、とても到達できないと感じるとすれば、ますます切実にキリストの内にそれを探し求めざるをえなくなるはずです。柔和で謙遜なこの生き方を私たちの内に入れてくださるのは内住のキリストだからです。これを切に求めているなら、その間、何よりもまず、神のご性質に関する聖なる奥義を探求しようではありませんか。神は瞬間ごとにすべてにおいてすべての働きをしてくださっているのですから。その奥義は、すべての自然とあらゆる被造物が、そして何よりも神の子ども一人ひとりが、その証人となることができるものです。その奥義とは、被造物は生ける神がご自分の知恵、力、善をあらわすことのできる器であり、また管であるということです。それ以外の何ものでもありません。すべての徳と恵みの根源、すべての信仰と受け入れられる礼拝の根源は、自分が受

け取っているもののほか何も持っていないと知ること、恵みを求めて神を待ち望み、ますます深い謙遜の内にひざをかがめることです。

この謙遜は、イエスが神のことを考えるつどに呼び覚まされ、へりくだりの実行に促すようなただの一時的な感情ではなく、彼の生き方全体をつらぬく精神でした。だからこそ、イエスは神との交わりだけでなく、人との交わりにおいてもまったく同じように謙遜であられたのです。イエスはご自分を、神が造られ神が愛された人間のための、神のしもべと考えました。その必然的な結果として、イエスはご自分を、彼を通じて神が愛のみわざを行なうための、人間に仕えるしもべと見なしておられたのです。イエスは一瞬たりともご自分の栄誉を求めたり、ご自分の力を自己弁護のために使ったりすることを考えませんでした。イエスの精神は、神が内側で働いてくださるままにご自分を委ねるという生き方で貫徹していました。クリスチャンはイエスの謙遜を研究しなければなりません。イエスの謙遜を、欠かせない贖いの本質として、神の御子の生き方にあらわされた祝福として、父なる神に対するたったひとつの真実な関係として、したがって私たちがイエスの一部にあずかるならイエスが必ず与えてくださるものとしてとらえるべきです。そうしてはじめて、謙遜の実質的な、天的な、明白な現れが私たちに致命的なほど欠乏していることに気づかされ、それが重荷となり悲しみとなって、平凡で儀式的な宗教では満足できなくなり、キリストの内住を示すこの第一にして主要な記章を獲得するよう努めるようになるでしょう。

兄弟の皆さん、あなたは謙遜を身に着ていますか。日々の生活に問いかけてください。イエスに問いかけてください。友人に問いかけてください。世界に問いかけてください。そして、神をほめたたえ始めましょう。なぜなら、天的な謙遜はあなたに向けてイエスの内に開示されているからです。この謙遜をあなたはこれまでわずかにしか知りませんでした。この謙遜によって、今まで味わったことのないような天的な祝福があなたの内に入ってくるようになります。

(四) イエスの教えにおける謙遜

「わたしから学びなさい。わたしの心は柔和でへりくだっている」マタイ一・二九
「あなたがたの間でいちばんになりたい者はだれでも、仕える者となりなさい。人の
子も仕えるために来たのだ」マタイ一〇・二七

キリストの生活における謙遜を前章で見してきました。キリストがご自分の心を私たちに
見せてくださった通りです。続いて、キリストの教えに耳を傾けましょう。ここで私
たちが聞くことになるのは、キリストがどんなふうに謙遜について話しておられるか、
どれほど人間に、特に弟子たちに対して、ご自分と同じように謙遜であるよう期待して
くださっているかです。聖句を丹念に読み解きましょう。私には聖句を引用する以上の
ことはほとんどできません。キリストが謙遜についてどれほど繰り返し、どれほど熱心
に教えてくださったか、十分に感じ取ってください。そうすれば、キリストが私たちに求
めておられるものについて正しい認識に近づけるでしょう。

(一)キリストの働きの最初を見ましょう。山上の垂訓の始めに語られた八福の教
えで、キリストはおっしゃいます。「霊の貧しい者は祝福されている。天の御国は彼らの
ものだから。柔和な者は祝福されている。彼らは地を相続するから。」天の御国に関
する宣言は、まさに最初のことばから、私たちが御国に入るためにただひとつの門が
開かれていることを明らかにしています。貧しい者、つまり自分からは何も持たない者
のところ、御国が来ます。柔和な者、つまり自分からは何も求めない者に、地の相
続権があります。天の祝福も地の祝福も、低き者のためにあります。なぜなら、天の生
活でも地の生活でも、謙遜が祝福を得る奥義だからです。

(二)「わたしから学びなさい。わたしの心は柔和でへりくだっているから、あなたの
たましいは安息を得ます。」イエスは教師でもありました。キリストは柔和と謙遜という
精神が何であるかを理解しておられます。そのため、私たちは教師としてキリストを受
け入れ、また、キリストから学び、受け取ることができるのです。柔和と謙遜はキリスト
が提供して下さる一つのもので、そのなかに、たましいの完全な安息を得ることが
できます。謙遜が救いになるのです。

(三)弟子たちは、御国で誰がいちばん偉いかを議論していました。そして、皆で主

に尋ねました(ルカ九・四六、マタイ一八・三)。キリストは子どもを弟子たちの真ん中に立たせて、おっしゃいました。「この小さな子どものように自分を低くする者はだれでも、高くされます。」だれが天の御国でいちばん偉大なのでしょうかという質問はじつさい、深みを突いていました。天の御国でいちばんの栄誉となるものは何でしょうか。イエスのほかにはだれも答えられません。天でのいちばんの栄光、天に向けられた真摯な関心、数々の恵みのなかで第一のもの、それは謙遜です。「あなたがたの間で最も小さい者が、いちばん偉大です。」

(四)ゼベダイの子たちはイエスに、御国のいと高き場所でイエスの右と左に座らせてくださいとお願いしました。イエスは、それを決めるのはわたしではなく父であり、それが用意されている人々に父が与えます、と言われました。彼らはその栄誉を自分で追求してはなりません。彼らの考えは謙遜のさかずきと謙遜のバプテスマに向かわなければなりません。それからイエスは付け加えました。「あなたがたの間でいちばんになりたい者はだれでも、仕える者になりなさい。」謙遜はキリストが天から来られたことを示す記章でした。ですから、謙遜が天での栄光をいただく一つの基準になります。つまり、最も低い者が最も神に近いのです。教会の最高の地位は、最もへりくだった者に約束されています。

(五)群衆と弟子たちに、パリサイ人のことについて、彼らが上座に座ることを好むと話されたあと、キリストはもう一度言われました(マタイ二三・一一)「あなたがたの間で最も偉大な者は、あなたがたに仕える者です。」謙遜は、神の御国で栄誉をいただくための唯一のはしごです。

(六)別の機会に、パリサイ人の家で、イエスは招かれて上座に座ろうとする客のたとえを話されました(ルカ一四・一～一一)。続けてこう言われました。「自分を高くする者はだれでも低くさせ、自分を低くする者は高められる。」この要求は変更できません。ほかに道はありません。自分を低めることだけが、高く上げられる道です。

(七)パリサイ人と取税人のたとえのあとで、キリストはまた話されました(ルカ一八・一四)。「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」神の宮で、神の御前で、神を礼拝所で、神と人とに対する深い真実な謙遜が充滿していないなら、どんなものも無価値です。

(八) 弟子たちの足を洗ってから、イエスはおっしゃいました(ヨハネ一三・一四)
「主であり師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのなら、あなたがたもお互いの足を洗いなさい。」ご命令の権威と、従順と服従の模範によって、謙遜は、弟子を名乗るためにいちばんはじめに必要で欠かすことのできない要素となりました。

(九) 聖餐の場でも、弟子たちはだれがいちばん偉いかをまだ議論していました。イエスは言われました。「あなたがたの間でいちばん偉い者は、いちばん若い者のようにしなさい。いちばん高い地位にある者は、仕える者のようにしなさい。わたしはあなたがたの間で仕える者のようです。」イエスがご自分の歩みによって私たちに開示された行程、そしてイエスが私たちを救うために働かせた救いの御力と霊は、すべての人に仕える者へと私を造り変えるこの謙遜です。

このテーマについての説教がどんなに少ないことでしょうか。謙遜の実践がどんなに少ないことでしょうか。謙遜の欠乏についての実感や告白がどんなに少ないことでしょうか。キリストの謙遜において彼に似た者となったことがはっきりわかるほどに到達する者がどんなに少ないか、と言っているのではありません。そうではなく、謙遜がたえず祈り求めるべき特有のテーマであると考える者が、どんなに少ないかを嘆いているのです。この世界に謙遜が見られる機会がどんなに少ないことでしょうか。教会の内部においてさえ、めったに見られません。

「あなたがたの間でいちばんになりたい者はだれでも、仕える者となりなさい。」イエスがここで言おうとされたことを信じるようにと、神はこのみことばを与えられたのです！ 忠実に仕える奴隷の性格がどんなものであったかをだれもが知っています。主人の関心に身を捧げ、主人に喜んでいただくために学ぶことにも配慮することにも思慮深く、主人の繁栄と栄誉と幸福にこの上ない喜びを見出します。これらの品性が見られるしもべは地上にもいます。彼らにとって、しもべという称号は栄光以外の何ものでもありません。私たちが自分をしもべとして、神の奴隷として捧げることができると知ったとき、そしてキリストの奉仕は私たちの至高の解放、罪と自己からの解放のためとわかったとき、私たちのうちどれだけ多くの者がそれをクリスチャンライフの新しい喜びとしてこなかったと気づかされるでしょうか。

いま、もう一つの教訓を学ぶ必要があります。イエスが私たちをお互いに仕える者

となるよう召しておられます。またそのことを心から受け入れるなら、この奉仕もまた、罪と自己から解放する新しい十分な祝福となるでしょう。はじめのうちは困難に思えるかもしれませんが。その理由はただ、自分をひとかどの人物と思わせる高ぶりがまだあるからです。神の御前には無に等しい者となることが被造物の栄光、イエスの精神、天の喜びであると一度でも学ぶなら、私たちは自分を苦しめようとする者にさえ仕える修養を心から歓迎するでしょう。私たち自身の心がこの本当の聖別に向けられるなら、私たちは自分を低くすることに関するイエスのことば一つひとつを熟慮する新しい動機を持つようになるでしょう。下るのに低すぎる場所はありません。へりくだるのに深すぎる場所もありません。みっともない奉仕も、嫌になって投げ出したくなる奉仕もありません。「わたしはあなたがたの間で仕える者のようです」と言われた方との交わりを他の人にも見せることさえできるなら、どんな奉仕もいとわなくなります。

兄弟の皆さん、ここに、いと高き生き方への道程があります。へりくだること、低くへりくだることです！ これこそ、御国で偉大なものになってキリストの右と左に座りたいと考えていた弟子たちに、イエスが言われた答えです。みずから高く上げられることを追求してはいけません。それは神の側でなされるみわざだからです。自分を低め、へりくだること、そして神と人との前に仕える者として自分を捧げてください。それがあなたの仕事だからです。それをあなたの一つの目的、一つの祈りとしてください。神は忠実な方です。水が低きを求め、低きを満たすのとちょうど同じで、へりくだって空の状態になっている被造物を神が見出されるなら、その瞬間に神の栄光と力がそこに流れ込んで、被造物を高く引き上げ、祝福してくださいます。自分を低くすることが私たちの責任ですが、高く上げることは神の責任です。神の大能の力によって、神の大きな愛によって、それをしてください。

ときどき、謙遜と柔和は、気品と大胆さと人間らしさを損なうというようなことを言う人がいます。ああ、自分を低くしてすべての人に仕える者となることこそが、天の御国での気品、天にいます王なる方があらわしてくださった威厳ある精神、神の似姿です！これが、いつまでも私たちの内にキリストの臨在があり、いつまでもキリストの力がとどまるという、喜びと栄誉をいただくための道程です。

柔和でへりくだった方であるイエスが、神に近づく道をご自分から学びなさいと私

たちを召しておられます。これまで読んできたみことばをよく読みましょう。ただひとつ私に必要なものは謙遜である、という考えに心が満たされるまで。そして、イエスはご自分が見せるものを与えてくださり、ご自身そのものを分け与えてくださると信じましょう。柔和でへりくだった方として、イエスは切に求める心のなかに来られて住んでくださいます。

(五) イエスの弟子たちの謙遜

「あなたがたの間で高い地位にある者は、仕える者のようでないさい」ルカ二二・二六

これまで、イエスの人格における謙遜と、イエスの教えにおける謙遜を学んできました。今度は、イエスの選んだ同行者の群れである十二使徒の謙遜を探求しましょう。もし使徒たちに謙遜が欠乏していることがわかれば、キリストと人間との違いがますます浮き彫りになり、ペンテコステの日に彼らの内に働いた力強い変化がどんなに素晴らしいものかを正しく理解できるようになります。加えて、人間のなかに吹き込まれたサタンの高ぶりに対してキリストの謙遜が完全に勝利されましたが、その勝利に私たちもあずかることのできるという事実が、いかに現実的なものであるか弟子たちの変化を通して証明されます。

イエスの教えからの引用ですで見たとおり、謙遜の恵みが弟子たちにまったく不足していたことが露呈した場面は何度かあります。あるときは、どうすれば自分たちのなかでだれがいちばん偉くなれるかを議論していました。またあるときは、ゼベダイの子たちが母とともに、御座の右と左という最高の座を願い求めました。また、のちの最後の晩餐でも、だれがいちばん偉いかという議論が持ち上がりました。弟子たちが主の御前にへりくだる瞬間がまったくなかったというわけではありません。ペテロがこう叫んだことがありました。「主よ、私から離れてください。私は罪人ですから。」弟子たちも、嵐を静めたキリストにすがりついて礼拝しました。しかし、ときおり見られる謙遜の表現は、ふだん彼らが考えていることをますます浮き彫りにするだけです。彼らの「自己」がどこにあり、どんな力を持っているかは、別の機会に、おのずから示されているとおりで、このすべての意味するところを研究すれば、最も大切な教訓が学べるでしょう。

第一に、どれだけ熱心で活動的な宗教であっても、謙遜が悲しいほどに欠落している場合があります。弟子たちがそうでした。彼らはイエスを熱烈に慕っていました。イエスのためにすべてを投げ打っていました。父なる神みずから、イエスが神のキリストであると教えてくださった者たちでした。イエスを信じ、イエスを愛し、イエスの戒めに従っていました。すべてを捨ててイエスに従いました。ほかの者たちが帰ってしまっても、

弟子たちは付き従いました。キリストと共に死ぬ心の準備もありました。しかし、このすべてよりも深いところに、闇の力がありませんでした。彼らが、救いをもたらすイエスの力の証人となる前に、その力を滅ぼし、追い出さなければなりません。それは今もひそやかに働いています。 信仰告白者や牧師、伝道者や働き人、宣教師や教師に、たとえ御霊の賜物が豊かに現れ、彼らが多くの人に祝福をもたらす管になっていたとしても、試練の時が来たり、親密な交わりによって知識が今よりも豊かに与えられたりすると、キリストの内住のしるしとしての謙遜の恵みが実は大きく欠けていたという事実が、痛ましく露呈するかもしれません。 謙遜が、最高の恵みのひとつであり、最も手に入れ難いもののひとつ、私たちが何よりも第一に目標とすべきもののひとつ、そして御霊に満たされることでキリストが内住し私たちの内側で生きてくださるときにはじめて、私たちに力強く与えられるもののひとつである、という教訓を確認できるでしょう。

第二に、自力で高ぶりを克服し、柔和でへりくだった心を得ようとする外面的な教えや個人的な努力は、どれも粉々に打ち砕かれます。三年間、弟子たちはイエスの訓練課程を受けました。イエスは何がいちばんの教訓であることを教えました。イエスが教えようとしたのは、「わたしから学びなさい。わたしの心は柔和でへりくだっているから」という教訓でした。弟子たちに、パリサイ人に、群衆に、謙遜だけが神の栄光に至る道であることをイエスは何度も話しました。イエスは人々の前で、神の謙遜を体現する神の小羊として生きていただけではありませんでした。イエスのご自分の生き方の深い奥義を一度ならず明らかにされました。「人の子は仕えられるために来たのではなく、仕えるために来た。」「わたしはあなたがたの間で仕える者のようである。」イエスは弟子たちの足を洗い、その模範にならうようにと命じました。 それでも、だれもそこから学びませんでした。聖餐の場でも、だれがいちばん偉いかという議論が持ち上がりました、弟子たちが繰り返しイエスの教えを学び、イエスをまたしても落胆させることのないようたく決心していたのは疑いありませんが、すべては無駄でした。その教えの真の目的は、弟子たちに、また私たちに、かけがえのない教訓を教えるためでした。それは、キリストご自身からの命令であっても外から命令を与えられるだけでは、どれほど説得力のある議論をしても、どれほど謙遜が美しいと感じても、どれほど真剣に個人的な努力や決心をしても、それらによっては高ぶりという悪魔を追い出す

ことができないということです。サタンがサタンを追い出しても、あらためてもっと強い者が、もっと巧妙に入ってくるだけです。神の持つておられる謙遜という新しい性質が力強く啓示され、古い性質と置き換わって、古い性質が現実的に私たちに働きかけたのと劣らぬほど、新しい性質がありありと現実的に私たちのものとならない限り、あらゆる努力は無益です。

第三に、私たちが本当の意味で謙遜になれるのは、神としての謙遜を持つておられる内住のキリストによる以外にありません。私たちの高ぶりは、ひとりの人、つまりアダムから来ています。私たちの謙遜も、ひとりの方から来なければなりません。高ぶりは私たちに属し、私たちをそのおぞましい力で支配しています。高ぶりが私たちのありのままの姿であり、偽りない心根だからです。謙遜もそれと同じあり方で、私たちのものとならなければなりません。謙遜が私たちのありのままの姿となり、偽りない心根とならなければなりません。高ぶりが容易にそこに向かっていく自然な性向だったのと同じように、謙遜もそうならなければなりませんし、事実そうなるでしょう。約束はこうです。「罪の満ちるところに、恵みがはるかに満ちあふれる。」この法則は心に関しても通用します。キリストが弟子たちに与えたすべての教えも、弟子たちの無駄になった努力も、結局はキリストが彼らの内に神としての力をもって入って来られるための必要な準備でした。そのゆえに、キリストが教えようと願ったものが、弟子たちの内側に成就されました。キリストはご自分の死によって悪魔の力を打ち砕き、罪を除き去り、永遠の贖いを成し遂げられました。キリストはご自分の復活によって父なる神からまったく新しいいのちを受け取られ、神の力によるいのちを人間に与えることができるようになりました。そのいのちを注がれることで、人の生き方は神の力で刷新され、満たされます。キリストは昇天において父の御霊を受けられたので、キリストが地上におられる間になしえなかったことを御霊を通じて行えるようになりました。キリストは愛する者たちとひとつとなって、彼らのいのちをじっさいに生きたものにして下さいました。その結果、彼らは父なる神の御前にキリストと同じ謙遜をもって生きることができるようになりました。なぜなら、キリストご自身が彼らの内に住み、息づいておられたからです。そして、ペンテコステの日には、キリストは来られ所有のものを得られました。先立つ教えと罪を自覚させる働き、イエスの教えによって起こさせられた願いと希望は、ペンテコステの日起こった力強い変化によって完全にまっとうされま

した。ヤコブとペテロとヨハネの生き方と手紙には、すべてが一新された証があり、イエスの柔和と苦しみの霊が彼らをじっさいにとらえていたことを証していました。

これらのことに何と言いましょか。私の読者はさまざまなレベルにおられるに違いありません。ある人は、この問題についてこれとって考えたことがないため、教会と信徒一人ひとりに切迫した重要性をもつ生涯をかけた問いであることをすぐには理解できないでしょう。ある人は自分の不足に心責められて、非常に熱心に努力をするけれども、徒労に終わり失望してきたことでしょう。またある人は、霊的祝福と御力を豊かに受けたことを喜んで証しすることができるにもかかわらず、だれの目にも明らかに欠乏しているものに関して必要な罪の自覚がなかったことでしょう。あるいは、ある人はこの謙遜の恵みに関しても主が解放と勝利を与えてくださったことを証しすることができますが、イエスの満ち満ちた身丈にまで達するためにまだどれほど恵みが必要で、それを期待すべきかを主が教えてくださったことでしょう。読者がどのレベルに属しておられるにせよ、私たちすべての者にとって、謙遜がキリスト教において占めている特別な場所に関して、もっと深い確信を求めべき差し迫った必要があることを私は力説したいと思います。そして、キリストの謙遜こそがキリストのいちばんの栄光であり、キリストの第一の命令であり、私たちのいと高き祝福であることを認識するのでなければ、教会にとっても信徒にとってもキリストのみこころにかなった者となることはまったく不可能であると強調したいと思います。この恵みに恐ろしく欠乏したままの弟子たちが、いったいどれだけ高みに達することができたかをよく考えようではありませんか。ほかの賜物で満足してしまわないよう神に祈ろうではありませんか。ほかで満足するなら、この恵みの欠乏が神の力が力強く働くことのできない隠れた原因であるという事実気づけません。御子と同じように、私たちも自分からは何もすることができないのだということを本当の意味で知り、それを生き方で示すところにおいてのみ、神がすべてを行なってください。

内住のキリストという真理が、その真理そのものが要求するとおりに、信じる者の体験の内に打ち立てられるなら、そのときにこそ教会は美しい装いと謙遜とで着飾り、教師たちも信徒たちも聖性の美しさに輝くようになります。

(六) 日常生活での謙遜

「目に見える兄弟を愛さない者が、どうやって目に見えない神を愛せようか。」ヨハネの手紙第一四・二〇 私たちが神を愛しているかどうかは毎日の人間関係とそこで示される愛によって確かめられるという考え方には、なんと厳粛な重みがあることでしょうか。また、神を愛していると言いながらも、身近な人たちとの日常生活という試験に合格するというかたちで神への愛が証明されなければ、その愛はただの思い違いであるという考え方もまた、厳粛に受け止められるべきです。私たちの謙遜についても同じことが言えます。自分が神の御前にへりくだっていると考えるのは容易です。しかし、人に対する謙遜だけが、神に対する謙遜が本物であることをはっきりと示します。それだけでなく、謙遜が私たちの内側を住まいとし、それが私たちの本心となり、キリストのように私たちがじっさいに自分の評判を求めていることをも、人に対する謙遜が不足なく証明してくれます。神の臨在のなかでへりくだりの心が、祈りの姿勢というよりも、生活そのものの精神になるとき、兄弟たちとの関係のあらゆる局面で謙遜がその姿をあらわします。次の教訓には深い重要性があります。すなわち、謙遜が本当の意味で私たちのものとなるとは、神の御前で祈るときにそれを示そうとすることではなく、私たちがいつもそれをもち歩き、普段のふるまいで実行していることであるという教訓です。日常生活のなにげない所作が、永遠を左右するたいせつな試験です。なぜなら、私たちを所有する霊が本当は何であるかを明示するのが日常生活のふるまいだからです。人が謙遜であるかどうかを知るためには、また謙遜な人がどのようにふるまうのかを知るためには、彼の日常生活のありふれたひとこまを観察しなければなりません。

これがイエスの教えたことではないでしょうか。イエスが謙遜の戒めを教えたのは、弟子たちがだれがいちばん偉いかと議論していたまさにそのときでした。ほかに、パリサイ人が宴会の上座を好み、会堂の上席を愛するのをイエスが見たまさにそのとき、そしてイエスが弟子たちに足を洗う模範を見せたまさにそのときのことでした。神の御前での謙遜は、人の前での謙遜によって証明されるのでなければ無意味です。

パウロの教えも同じです。ローマの人々にパウロはこう書いています。「お互いに尊敬の心で相手を自分よりもたいせつにしなさい。」「高ぶった思いを持たず、低い者に

目線を合わせなさい。」「うぬぼれて自分を賢い者だと思わないようにしなさい。」またコリントの人々にはこう書いています。「愛は」——根本に謙遜のない愛はありえませんが——「自分を誇らず、高慢にならず、自分の利益を顧みず、怒りません。」ガラテヤの人々にはこうです。「愛をもってお互いに仕え合いなさい。お互いに虚栄に走ったり、怒りをぶつけ合ったり、うらやんだりしないようにしよう。」エペソの人々には、天の生活について書かれた三つの素晴らしい章の直後に、こう書いています。「したがって、謙遜と柔和を尽くして歩みなさい。愛をもってお互いに寛容になり忍耐しなさい。」「いつも感謝し、キリストをおそれうやまってお互いに従いなさい。」ピリピの人々にはこうです。「党派心や虚栄心から何事もしないようにしなさい。そうではなく、へりくだった心でお互いに相手を自分よりもすぐれていると思いなさい。キリスト・イエスも抱いておられるのと同じ思いをあなたがたの内に持ちなさい。キリストはご自分をむなしくし、しもべの形をとり、ご自分を低くされた。」コロサイの人々にはこうです。「あわれみ、親切、謙遜、柔和、寛容、忍耐の心をお互いに持ちなさい。主があなたがたをゆるしてくださったように、お互いにゆるし合いなさい。」真実なへりくだりと謙遜の心が見られる場所は、私たちのお互いに対する人間関係と態度のなかです。神の御前での謙遜は、それが周りの人たちにイエスの謙遜を明らかにするよう私たちを整えるのでなければ、価値がありません。

謙遜な人はどんなときもルールにのっとって行動しようとしします。そのルールとは「お互いに尊敬の心で相手を自分よりもたいせつにしなさい、お互いに仕える者となりなさい、相手を自分よりもすぐれた者と思いなさい、お互いに従いなさい」というものです。こんな質問がよく寄せられます。「相手を自分よりもすぐれた者と思うと言われても、相手が知恵も聖さも明らかに私よりずっと下で、生まれつきの能力も、いただいた恵みでさえも私より劣っているとわかるときには、どうすればよいのでしょうか。」その質問からただちに分かるのは、私たちが本当のへりくだった心をいかに理解していないかということです。真実な謙遜が来るときは、私たちが神の光に照らされて自分自身を無に等しい者と見なし、「私」に別れを告げ、それを捨て去ることを神との間で取り決め、神にすべてになっていただいてからです。このことを経て「私はあなたを見出すこと以外に何も欲しません」と言えるたましいは、もう自分をほかの人と比べません。そうなれば、自分に執着することは神の臨在のなかで永遠になくなりま

す。周りの人と会うときには自分が無に等しい者であり、また自分からは何も求めない者であるとして接します。神のしもべとなり、神の目的のためにすべての人に仕える者となるのです。忠実なしもべは、自分が主人よりも賢かったとしても、しもべとしての真実な精神と品位を保ちます。謙遜な人は、どんなに弱々しい人をもどんなに卑しい人をも、一人ひとりを神の子どもと見なします。そして、一人ひとりを尊重し、王の子どもとしての尊敬をもって自分よりもたいせつにします。弟子たちの足を洗ったキリストの精神によって、私たちはみずから最も小さい者となってお互いに仕えることに喜びを感じるようになります。

謙遜な人は嫉妬しません。ほかの人が自分の前で優遇され祝福されるときにも、神をほめたたえることができます。ほかの人が賞賛され、自分が忘れられていても、謙遜な人はそれを気にせずいられます。その理由は、彼は神の臨在のなかで「私は無に等しい」とパウロと共に言うことを学んだからです。自分を満足させず、自分の栄誉を求めもしないイエスの精神を、彼は自分の生き方の精神として受け取ったのです。

周りのクリスチャンの失敗や罪を見て、それに難癖をつけようとする考えを持ったり、厳しく責める言葉を発しそうになったりして、いらだちや怒りに捕らえようとする誘惑のようなものの真っ只中にあっても、謙遜な人はその心のなかに戒めがこだまし、それを生活のなかで示します。「お互いに寛容の心を持ちなさい。主があなたがたをゆるしてくださったように、お互いにゆるし合いなさい。」彼が学んだのは、主イエスをこの身に着るときに、あわれみ、親切、謙遜、柔和、寛容の心を着ることができるということです。イエスが「私」の場所にいてくださるので、イエスがゆるしてくださったように人をゆるすのはもう不可能ではありません。彼の謙遜は、ただ単に自分を取るに足りない者とする考えや言葉だけで形作られているのではなく、パウロが「謙遜」という単語を「あわれみ、親切」と「柔和、寛容」の間に書いたように、神の小羊のしるしとして知られている、優しくへりくだった穏やかさによっても形作られています。

クリスチャンライフの高みに達する経験をやっきになって求めるあまりに、信徒がいわゆる人間的な徳のほうに、嬉々として向かっていくという危険に陥ることがよくあります。人間的な徳とはたとえば、大胆さ、喜び、世への軽蔑、宗教的熱意、自己犠牲と

いったものです。これらは昔のストア派でも教えられ、実践されていた徳です。一方で、もっと深くもっと穏やかな、もっと神に近くもっと天に由来する恵みがあります。それはイエスが天からもたらしてくださったので、地上でイエスがはじめて説き明かしたものです。その徳はイエスの十字架と「私」の死を、今までよりも明確に結び付けてくれます。すなわち、心の貧しさ、柔和、謙遜、へりくだりです。ところが、これらについて考えを深めたりその価値が見直されたりすることがほとんどありません。ですから、あわれみ、親切、謙遜、柔和、寛容の心を着ようではありませんか。私たちがキリストに似た者であると証明される根拠は、失われた者を救うために熱心になることだけでなく、すべての人の前に兄弟としての交わりを持って、主が私たちをゆるしてくださったように、私たちがお互いに寛容になり、お互いをゆるすようになることです。

クリスチャンの皆さん、聖書が謙遜な人をどう描写しているかを学ぼうではありませんか。そして、兄弟たちに、また世界に向けて、私たちの姿に原型となる方と似ている性質が見られるでしょうかと尋ねようではありませんか。この書の各章を、どのように神が私たちの内に働いてくださるかを約束したものであると思い、またイエスの御霊が私たちの内側に生み出してくださるものを教える啓示であると考えるほどに、まずは厳粛に受け止めようではありませんか。また、失敗や不足の一つひとつをあれこれ悔やまず謙遜と柔和の糧として、柔和でへりくだった神の小羊のところに向かおうではありませんか。キリストを私の心にお迎えしてキリストが私の王座についてくださるとき、キリストの謙遜と穏和が私たちの内側から流れ出る生ける水の川のひとつとなる、という保証があるのですから。

「私はイエスを知っています。イエスは私のたましいにとって極めて貴重な方です。しかし、私の内に優しさ、忍耐強さ、親切さを保つことのできない何かがあります。それを何とか押さえつけようとしたのですが、それはなくなりませんでした。私はイエスにすがりついて助けを求めました。私が自分の意志をイエスにゆだねたとき、イエスが私の心に来てくださり、優しくないすべての思い、親切でないすべての思い、忍耐強くないすべての思いを追い出してくださいました。そうして、イエスは私の心のドアを閉めてくださいました。」ジョージ・フォックス

もう一度、以前に申し上げたことを繰り返します。教会が神に由来するこの謙遜を

受け取れていないために苦しんでいるという事実に関して、考察する機会があまりにも少ないと私は切実に感じています。謙遜と愛の精神をもったクリスチャンがさまざまな地域の教会をいくつも知るにつれて、嘆かわしくもそこに愛と寛容の精神が欠けているとわかって、深い悲嘆の言葉をこぼすことがあります。もしヨーロッパで男性も女性も自分の交友関係を選べて、それぞれ考え方の合わない人たちと接するようになったとしたら、寛容になること、愛すること、平和のきずなの内に御霊の一致を保つことが、いかに難しいかを痛感するでしょう。そして、仲間内に対しては喜んで助けの手を伸べていた人たちでも、困難を感じ、疲れ果てるでしょう。そうなる理由はただひとつです。謙遜の欠如です。自分を無に等しい者に見なす謙遜は、みずから最も小さい者となり、また小さい者として扱われることを喜び、ただイエスのように、ほかの人たちに仕える者、助ける者、慰める者となって、どんなに低い人にもどんなに卑しい人にも同じように接しようとするのです。

では、キリストのために喜んで自分を投げ打った人が、こんどは兄弟たちのために自分を投げ打つ番になると、非常な困難を覚えるのはどうしてなのでしょう。その責任は教会にないといえるのでしょうか。教会は信徒に、キリストの謙遜こそが第一の徳であって、すべての御霊の恵みと力のなかで最高のものであることを今までほとんど教えてきませんでした。キリストが謙遜を最もたいせつな教えとし、必要不可欠かつ実現可能なものとして第一に宣べ伝えたように、私たちもキリストのご性質に似た謙遜をそのように扱うべきであることが、今までほとんど明確にされてきませんでした。とはいえ、失望せずにいましょう。この恵みに不足しているということを実感したのですから、神からもっと多くのものをいただけるというますます大きな期待を持つようではありませんか。兄弟が私たちを試み、苦しみにあわせるとき、彼を神の恵みの手段と思い、私たちをきよめるための神の道具ととらえ、私たちのいのちであるイエスが私たちの内側に吹き込んでくださる謙遜を実践させるために神が与えたチャンスと考えようではありませんか。私は無であり、神がすべてであるという信仰を持つようではありませんか。そうすれば、私たちは自分の目では何も探し求めず、神の力によって、お互いに愛をもって仕えることだけを追い求めるようになります。

(七) 謙遜ときよめ

「その者が言う、私から離れてそこに立っていなさい。私はあなたよりも聖なる者だから。」イザヤ六五・五

近年、ホーリネス運動がよく話題にのびります。このゆえに神をほめたたえます。非常にたくさんの人たちがきよめを求め、きよめに関する教えを伝えたりきよめの集会を開いたりしてくれるホーリネス運動の主唱者に会いたがっていると聞いています。キリストにあるきよめ、また信仰によるきよめの祝福された真理は、かつてないほどに力説されています。私たちが追い求めているきよめや、私たちがついに獲得したと宣言するきよめが、ほんとうに真理でありいのちであるかどうかを確かめる大きな試金石は、そこに結果として謙遜が豊かに現れているかどうかです。被造物にとって謙遜は、神の聖さが彼の内側にとどまり、彼を通して神の聖さが輝くようになるために必要なもののひとつです。私たちがきよめてくださる神の聖なる方イエスにとっては、神のご性質である謙遜は、そのいのち、その死、その昇天の奥義です。ですから、私たちのきよめを確かめる確実な試験は、神と人との前での謙遜というしるしです。謙遜はきよめの開花であり、きよめの美です。

逆に、偽のきよめを見極めるいちばんのしるしは、謙遜の欠如です。きよめを探求する人がみな警戒しなければならないのは、霊で始まったことが無意識のうちに肉によって完成されたり、まったく予期しないところに高ぶりが忍び寄ってきたりすることです。ふたりの男が神殿に祈りに詣でました。ひとりパリサイ人、もうひとり取税人でした。神殿はどこよりも聖なる場所でしたが、パリサイ人はそこに入ることができました。高ぶりの心は神の神殿の中にも頭をもたげるので、礼拝は自己満悦の舞台になりえます。キリストがパリサイ人の高ぶりを明るみに引き出してからというもの、パリサイ人は取税人の装いをまとっています。そのため、深く罪を告白する者は、高いきよめを宣言する者と同様に、警戒していなければなりません。私たちの心を神の神殿にさせていただくことを私たちが切実に願っている最中に、ふたりの男が祈りに詣でるのを私たちは発見します。そこでは、取税人にとって危険とは、彼を見下している隣のパリサイ人から来るのではなく、彼を賞賛し持ち上げる内なるパリサイ人から来るものであることがわかります。 神の神殿で、神のきよさの臨在のなかで、私たち

が自分をすべての者のうちで最も聖なる者であると考えるとき、高ぶりに陥らないよう気をつまけようではありませんか。「ある日、神の子どもたちが主の御前に立つために来た。そこにはサタンも彼らの間に来ていた。」

「神よ、私がほかの者たちのようでないことを、特にこの取税人のようでないことを感謝いたします。」感謝をささげるその内容に、また神にささげる感謝そのもののなかに、自己満悦の種があります。ときには、神がすべてをしてくださったと告白する言葉のなかにさえも、自己満悦があるかもしれません。そうです。神殿の中で悔い改めと神の恵みのみに信頼する言葉が聞かれているときでさえ、パリサイ人が賛美の音色を借りて、神に感謝するふりをしながら自分自身をほめてたたえていることがあります。高ぶりは、賛美や悔い改めの外観を装うことがあります。「私がほかの者たちのようでない」という言葉を高ぶりの罪だと理解して言わないようにしたとしても、そこに宿る高ぶりの精神は、共に礼拝する者たちや仲間たちに向けた私たちの感情や言葉のなかに見られることがあまりにも多くあります。これが事実なのかどうかご存じなければ、教会やクリスチャンたちがお互いのことをよくどんなふうにご存じをお聞きください。イエスのような柔和と穏和がほとんど見られないことがわかるでしょう。深い謙遜こそが、イエスのしもべが自分やお互いを表現するための基調でなければならぬということが、ほとんど記憶されていません。多くの教会や会衆で、多くの教団や協議会で、多くの団体や共同体で、さらには多くの異教徒への宣教会で、調和がくずれ、神の働きが停滞していないでしょうか。その原因は、聖徒とされている人たちが、実は神経質で短気で怒りっぽく、自己弁護と自己主張に明け暮れ、容赦ない裁きと冷酷な言葉を投げかけ、ほかの人を自分よりもすぐれているとは思わず、彼らのきよめが聖徒たちの柔和をもたらしきよめになっていないからではないでしょうか。彼らの霊的な歴史において、偉大なへりくだりや、たましいの砕かれた経験が何度かあったかもしれませんが、このことと、謙遜を着ること、また謙遜なたましいを持つこと、またそれぞれが自分をほかの人のしもべと考えるへりくだりの心を持つこと、またイエス・キリストの内にもあったへりくだりの心を示すようになることとは、なんと大きな違いではないでしょうか。

「私から離れてそこに立っていなさい。私はあなたよりも聖なる者だから！」これがきよめの姿だとしたら、たちの悪い冗談です！ 聖なる方イエスはへりくだった方です。

最も聖なる者が最もへりくだった者となるのです。神以外に聖なる方はいません。私たちが神のご性質にあずかれば、それだけきよめにあずかることになります。私たちがどれだけ神のご性質にあずかったかによって、私たちの謙遜がほんものになります。なぜなら、謙遜とは、神がすべてになってくださるというビジョンによって「私」が消滅していくことにほかならないからです。最も聖なる者が最もへりくだった者となります。ああ！ イザヤの時代にあからさまに高慢なユダヤ人はあまり多く見られなかったように、私たちもこのように話してはいけないと作法を教えられてはいますが、その高ぶりの精神は、仲間である聖徒との交わりだけでなく、この世の子どもたちとの交わりにおいても、いまでも非常によく見られます。意見を話すときの精神、仕事を行なうときの精神、失敗を告白するときの精神において、態度は取税人の装いをしているものの、その声はいまもパリサイ人のそれなのです。「ああ、神よ、私がほかの者たちのようでないことを、感謝いたします。」

では、人がほんとうに自分を「すべての聖徒たちのうちで最も小さい者」として、すべての人たちに仕える者になる謙遜は、いまあるのでしょうか。あります。「愛は、自分を誇らず、高慢にならず、自分の利益を顧みません。」心のなかで愛の精神が広く行き渡っている場所、つまり、満ち満ちた神のご性質が生まれて、柔和でへりくだった神の小羊キリストがほんとうの意味で内側に形作られる場所に、完全な愛の力が与えられます。完全な愛は自分自身を忘れ、どんなに卑しい人に対しても、ほかの人を祝福すること、寛容になること、賞賛することに自らの祝福を見いだします。この愛が入る場所に、神ご自身も入ります。神ご自身が御力をもって入った場所で、神はご自分がすべてであり、被造物が無に等しい者になることを明らかにされます。そして、被造物が神の御前に無に等しい者になる場所で、彼は周りの被造物に対して謙遜以外の何ものでもなくなります。神の臨在は何度か体験すればよいとか一定期間体験すればよいとかいうものではなく、永遠にわたってたましいがその下で生きるにふさわしいものです。ですから、神の御前に深くへりくだることが、神の臨在の聖なる場所にふさわしく、その場所からすべての言葉もすべての働きも生じるのです。

どうか神が私たちに教えてくださいますように。周りの人に対して抱く考え、言葉、感情が神に対する謙遜を試すテストであり、逆に神の御前での謙遜だけが、周りの人にいつでもへりくだることを可能する力であることを。私たちの謙遜は、私たちの内

側におられる神の小羊キリストのいのちでなければなりません。

きよめの教師をしているすべての人たちに、講壇に立っていてもステージに立っていても、警鐘を鳴らそうではありませんか。また、きよめを求めるすべての人たちに、祈りの小部屋にいても大きな集会にいても、警鐘を鳴らそうではありませんか。自分がきよめられた者であるという高ぶりほど危険なものはありません。その高ぶりは狡猾に心に侵入し、知らぬ間に広がっていくからです。それはあからさまに「私から離れてそこに立っていなさい。私はあなたより聖なる者だから」と言ったりしないだけでなく、そういう考えを持つことすらありません。じっさい、そういう考えは憎むべきものであると分かっているはずです。にもかかわらず、まったく無意識のうちに、自分の成し遂げたことに自己満悦したくなる隠されたたましいの習慣がだんだんと成長し、ほかの人と比べて自分がいかにすぐれているかが気になって仕方なくなります。その高ぶりは、いつも特別な自己主張や自己賞賛のなかに見出されるものではなく、むしろ、神の栄光を見た者のたましいに刻まれざるを得ない、自分が卑しい者であるという深い洞察(ヨブ四二・五～六、イザヤ六・五)が単純に欠けているところにこそ見出されるものです。その高ぶりは言葉や思考のなかだけでなく、ほかの人についての話し方や話す調子にもその姿を現わします。霊の見分けの賜物をもつ人なら、「私」の力をそこに見出すに違いありません。この世でさえ、鋭い目でそれを見分けるでしょう。そればかりか、それこそが、天のいのちを持っていると口では言っても天からの特別な実をみよらせていない証拠ではないかと指摘するでしょう。ああ、兄弟の皆さん！目を覚ましましょう。私たちがきよめと考えるものにどれだけ進歩があったとしても、私たちが学んでいるこの謙遜が増し加わるのでない限り、きよい行いや聖化や信仰についての美辞麗句や満足感にただ酔いしれているだけで、「私」の消滅という、神の臨在をしめす唯一の確かな記章をつねに外したままです。イエスの謙遜を身に着るまで、イエスを避けどころとし、イエスを隠れ場としようではありませんか。それだけが、私たちのきよめです。

(八) 謙遜と罪

「私は罪人のかしらです」第一テモテ一・一五

謙遜はしばしば悔悛や罪悪感と同じものと見なされます。結果的に、謙遜を成長させる方法は、たましいをいつも罪でいっぱいにするほかにないように思われています。私たちがここまで学んできたのは、謙遜はもっと別のものであり、罪悪感などより深いものであるということだと思えます。主イエスの教えや使徒たちの書簡で、謙遜という徳が罪と無関係に何度も教えられていることをこれまで確認してきました。この本質において謙遜がきよめと祝福の核心であるということは、被造物が創造主に向かう関係全体をみても、またイエスが地上で現し私たちに分け与えたその生き方からも分かります。「私」が退いて神に即位していただくこと、これが謙遜です。神がすべてになってくださる場所で「私」は無に等しい者になります。

私が特に出版の必要を感じたのは真理のこの側面ではありますが、とはいえ、人の罪と神の恵みが聖徒の謙遜に新しい深さや高さをいかに与えるかを述べる必要もあるといくらか感じます。使徒パウロのような男を見ればそれだけで、彼が神に買い取られた聖徒として生涯のすべてにわたって、自分が罪人であったという自覚が打ち消しがたいほど深く根づいていたことが分かります。私たちはみな、パウロが迫害者であり冒涇者であった自らの過去について述べた聖書の節を知っています。「私は使徒たちのうちで最も小さな者であり、使徒と呼ばれる価値のない者です。神の教会を迫害したからです。……私はだれよりも多く働きました。それをしたのは私ではなく、私と共におられる神の恵みです。」(第一コリント一五・九～一〇)「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、異邦人に宣べ伝えるというこの恵みが与えられました。」(エペソ三・八)「私は以前は神を冒涇する者、迫害する者、侮辱する者でした。それなのに、私は恵みをいただきました。それは私が信じておらず、知らないで行なったからです。キリスト・イエスは世に来られたのは、罪人を救うためです。私は罪人のかしらです。」(第一テモテ一・一三、一五)神の恵みは彼を救いました。もはや神は彼の罪を永遠に思い出しません。しかし、彼のほうは自分がどんなにいまわしい罪人であったかを生涯忘れられませんでした。彼が神の救いを喜び楽しむにつれて、また言葉にならない喜びをもって神の恵みに満たされる経験をするにつれて、私は救われ

た罪人であるという自覚がますます明瞭になり、その自覚によって救いがありありと胸に迫る貴いものになるのでなければ、救いには何の意味もなく価値もないという考えに至りました。神が御腕をのばして愛し、王冠をさずけてくださった者がひとりの罪人であったということを、彼は片時も忘れられませんでした。

いま引用した箇所について、パウロが日常的に罪を犯していることを告白したのだ、と主張する人がよくいます。それぞれの聖句のつながりに気をつけながら読みさえすれば、それが的を得ていないのがわかるでしょう。これらの聖句にはもっと深い意味があります。永遠にわたって存続する事柄について述べており、謙遜に対して、神への驚嘆と崇拝をともなった深い基調を与えるものです。謙遜とは、神に買い取られた者が、その罪を小羊の血によって洗い清められた者として、神の御座の前にひざまずくときの姿勢でもあるということです。彼らは買い取られた罪人です。たとえ栄光のなかに入れられたとしても、断じてそれ以外の者ではありえません。恵みが神の子どもに与えると約束したすべてのものに対して、それを受ける唯一の権利と資格が、彼が罪から救い出されたという事実にあると実感しなければなりません。それなしには、神の愛の光にすみずみまで照らされてこのいのちを生きることは一瞬たりともできません。罪人として神に近づくときに持っていた謙遜は、新しい被造物としてのふさわしい生き方を学ぶときに新たな意味を与られます。それからさらに、被造物としての新生において与えられた謙遜は、それが神の不思議な贖いのわざを思い起こさせる愛の金字塔となるとときに、最も深く最も豊かな色彩を帯びて神を崇める姿勢になります。

パウロがこれらのことばによって教えようとした本当の意義は、次の注目すべき事実気づくときにさらに力強く明らかにされます。それは、パウロがクリスチャンとしての生涯を通じて書いた手紙のなかには、個人的な感情をはげしく吐露している文書においてさえ、罪の告白のようなものがひとつも記されていないという事実です。彼が自らの欠点や欠陥について言及した箇所はどこにもなく、私は義務を遂行できなかったとか、完全な愛の律法にそむいて罪を犯したとかいったことを読者に書いた箇所はどこにも見られません。反対に、自らの身の潔白を申し立てた箇所が少なくありません。そのような主張は、彼が神と人との前に責められるところのない生活をしていたのでなければ、意味が通じません。「私たちがあなたがたに対してどんなにきよく、

正しく、責められるところのないようにふるまったかに関して、あなたがたと神が証人です。」(第一テサロニケニ・一〇)「私たちの光栄はこれです。すなわち、私たちの良心が証ししていますが、私たちがこの世に対し、特にあなたがたに対して神のきよさと誠実をもってふるまってきたことです。」(第二コリント一・一二)これは理想や願望ではありません。パウロがじっさいにどのように生きたのかを示すことばです。罪の告白が書かれていないことについてどんな説明がありうるとしても、そのことが聖霊の力にある生き方を指し示していることはすべての人が認めるに違いありません。そのような生き方は私たちの時代においてほとんど現実のものとならず、期待もされませんが。

私が強調したいポイントはこうです。罪の告白が書かれていないというまさにその事実が、毎日犯す個々の罪においてよりも、片時も忘れることのできない罪の習慣性においてこそ深い謙遜の奥義が見られ、恵みが豊かに与えられるほどそのことがますますはっきりと示されるという真理に、大きな力を与えるということです。私たちのただひとつの場所、ただひとつの祝福される場所、神の御前に生きることのできるただひとつの場所は、「私は恵みによって救われた罪人です」と告白することに最高の喜びを見出す場所なのです。

パウロがかつて恵みを受ける前に犯した数々のおぞましい罪の記憶と、現在では罪から守られているという意識とは、たえず忍び寄ってきて罪に陥れようとする隠された闇の力を内住のキリストの臨在と力によって追い出すことができるという不朽の記憶と、かたく結びついています。「私のなかに、私の肉のなかに、良いものが住んでいません。」ローマ七章で語られたこのことばは、肉を滅びに向かうものとして述べています。ローマ八章の栄光ある解放はこうです。「いまや、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則が、私をとりこにしていた罪の法則から私を解放しました。」この解放とは肉の消滅ではなく、肉の聖別でもありませんでした。むしろ、御霊が肉体の行いを克服することで与えられる、絶えざる御霊の勝利でした。健康が病気を駆逐するように、光が闇を一掃するように、いのちが死を征服するように、御霊によるキリストの内住はたましいの健康であり、光であり、いのちです。けれども、それとともに、罪に対して無力であり私は破滅に陥っているという自覚が、途切れずくじかれない聖霊の働きに対する信仰を鍛え上げて、神の恵みだけによって生きる謙遜の下で至高の信仰

と喜びがその召使いとなるような、懲らしめを通った信頼感のなかへと入っていきます。

先に引用した罪人に関する三つの節はどれも、パウロを深いへりくだりへと導いたのは彼の上に与えられた素晴らしい恵みであり、パウロはどんなときもその恵みの必要を実感していたということを示しています。その神の恵みが、彼と共にあってほかのだれよりも多く働くことを可能にしました。その恵みが、キリストのはかり知れない富を異邦人に宣べ伝えさせました。その恵みが、キリスト・イエスにある信仰と愛を豊かに満ちあふれさせました。それが罪人のためにあるということがこの恵みの本質であり栄光です。この恵みこそが、自分がかつて罪を犯し、罪のなかに安住している者であったという意識を、彼のうちにはげしく奮い立たせ続けました。「罪の満ちるところには、恵みも豊かに満ちあふれました。」この聖句が明らかにするのは、恵みの本質がどのようにして罪を取り扱いそれを除くことができるか、また、私は罪人であるという意識が強くなればなるほど恵みをますます豊かに経験するのはどうしてなのかという点です。罪ではなく、神の恵みこそが、人が罪人であることを示し、罪人であったことを思い出させて、人を真実に継続的にへりくだらせます。罪ではなく、恵みこそが、私はほんとうに罪人であると悟らせ、私は卑しい者であると深く悟らせる罪人の場所へと導いて、そこから離れないようにするのです。

もしかすると、少なからぬ人々が強烈な表現で自らを罪に定め、自らの罪を公に言い表すことによって、謙遜になることを探求しているにもかかわらず、謙遜の霊、つまり親切とあわれみ、柔和と忍耐強さを伴った「謙遜の心」にいつこうに近づけずにいます、と悲しみをもって告白しているのではないのでしょうか。最も深い自己嫌悪のさなかにあっても、自分のことで心がいっぱいになっているなら、「私」から解放されるはずがありません。私たちを謙遜へと導くものは、罪に定める律法だけではなく、罪から解放する神の恵みによって、神がご自分を現してくださる啓示なのです。律法は心を打ち砕いて恐れを抱かせます。しかし、ただ恵みだけが、たましいにとって第二の本性となるあの甘美な謙遜を喜びと共にもたらします。アブラハムやヤコブ、ヨブやイザヤが深くひざをかがめたのは、神が恵みのうちにご自分を知らせるために近くへ引き寄せて、きよさのうちにご自分を現してくださったからです。神は創造主ですから、被造物が無になるときご自分がすべてとなってくださいますが、同じように、神は恵み豊かな

贖い主ですから、罪人が罪の満ちるときに来られてご自分がすべてとなってくださいます。このよう方として神を待ち望み、信頼し、礼拝するとき、そのたましいは神の臨在に満たされ、「私」を残す余地がなくなるのです。そうして、この約束だけが成就されます。「その日、人の高ぶりはかがめられ、主だけが高く上げられる。」

聖なるいつくしみ深い神の愛の光にすみずみまで照らされた罪人が、キリストと聖霊を通じて与えられる神の愛を心に豊かに住ませる経験をするなら、もはやへりくだるほかありません。罪で満たされるのではなく、神に満たされることこそが、「私」からの解放をもたらします。

(九) 謙遜と信仰

「あなたがたはお互いからの栄誉は受け入れて、唯一の神からの栄誉を求めないのに、どうして信じることができようか」(ヨハネ五・四四)

最近、ある講演でこういうことを聞きました。クリスチャンの生き方を成熟させる数々の祝福がしばしばショーウィンドウに並べられた商品のようにになっている、と。人がそれを近くで眺めることはできるけれども、手が届かないということです。もしショーウィンドウに並べられた商品に手を伸ばして取るように言われたら、人は「できません」と答えるでしょう。「私と商品の間は厚いガラスでへだてられています」と。クリスチャンについても同様です。クリスチャンにはまったき平安と安息を与えるという祝福や、愛と喜びであふれさせるという祝福や、交わりと実りのうちにとどまるという祝福が、約束として与えられていますが、それらをはっきり知っていても、本当の意味でそれを所有することを邪魔する何かがあるように感じることもあるかもしれません。それはいったい何でしょうか。高ぶりです。それ以外にありません。信仰についての確実な約束は無償で与えられています。また、力強い招きと励ましは与えられています。さらに、信仰がたのみとする神の大能の力はすぐ近くにあり、無償でいただくことができます。とすれば、数々の祝福を私たちのものにするのを妨害しているものは、信仰を妨害しているのです。この章の冒頭の聖句でイエスが明らかになされたのは、高ぶりこそが信仰を不可能にしているという点です。

ただひとつの必要なことは、ほんの少しでも信仰とは何かを考えることです。信仰とは「私は無力で取るに足らない者です」と告白し、自分を明け渡して神に働いていただくのを待ち望むことではないでしょうか。信仰とはそれ自体、ありうる限りの最も謙遜なもの、すなわち、私たちにふさわしい場所が、恵みが与えるもの以外に何も欲しがったり所有したり行なったりすることのできないしもべの位置であると、受諾することではないでしょうか！ 謙遜とは単純に、信頼がたましいの土台となるように自らを整えていく品性です。そして、高ぶりがどんなに息をひそめても、「私」の追求、「私」の意志、「私」の誇り、「私」の称揚を生かしておくなら、高ぶりがひと息の呼吸をするごとに「私」が強大になっていきます。「私」は御国に入ることができません。また御国の財産を所有することもできません。なぜなら、神を現にそうである方、またそうであらね

ばならない方——すべてにおいてすべてになってくださる方——になっていただくことを拒絶するからです。

信仰は天の世界とその祝福を知覚し把握するための感覚器官です。信仰は神からの栄誉を追い求めます。その栄誉は神がすべてになってくださる場所からのみ来るものです。私たちがお互いからの栄誉を求めている限り、また人からの賞賛や名声といったこの世の栄誉を求め、愛し、だれにも取られまいとかたく握っている限り、神からの栄誉を求めることはありません。それを受け取ることはできません。高ぶりは信仰を不可能にします。救いは、十字架とはりつけにされたキリストを通じて来ます。救いは、はりつけにされたキリストとの交わりを十字架の御霊において持つことです。救いはイエスの謙遜と結合しそこに喜びを見出すこと、救いはその謙遜に参与することです。高ぶりがなおも君臨しているため信仰が弱りきっているのですから、私たちがこれまで謙遜を救いの最も必要かつ祝福された部分として、切に祈り求めることさえもほとんど学んでこなかったのは当然です。

謙遜と信仰は、多くの人々が知っているよりも密接な関係にあることが聖書から分かります。キリストの生涯を見てください。キリストが「偉大な信仰」と言われたふたつのケースがあります。千人隊長の信仰をキリストは驚かれました。「わたしはこのように偉大な信仰をイスラエルのなかでさえ見たことがない！」それは、千人隊長がこう言ったからではないでしょうか。「私にはあなたを屋根の下にお入れする価値すらありません。」また、子犬の名を受け入れた母にキリストは言われました。「ああ、婦人よ。あなたの信仰は偉大です。」それはこう言ったからではないでしょうか。「はい、主よ。しかし犬もパンくずくらいはいただきます。」謙遜こそが、たましいを神の御前に無に等しい者へとへりくだらせ、信仰に至るまでのあらゆる障害を取り除き、神への全幅の信頼を寄せないことによって神の御名を汚すことだけを恐れるようにさせるのです。

兄弟の皆さん。ここに、私たちがきよめを追求するときに失敗する原因があるのではないのでしょうか。それがこの高ぶりではないのでしょうか。私たちはこれまで次のことを知りませんでした。この高ぶりこそが私たちのきよい生活と信仰をきわめて表面的で短命なものにしてきたということ。また、高ぶり「私」がひそやかに私たちの内側

でどれほど働いていたかを。そして、神だけがその臨在と大能の力によってそれらを追い出すことができる方であるということ。私たちは次のことを理解していませんでした。古い「私」のいた場所が全面的に新しい神のご性質に満たされる以外には、私たちを本当の意味でへりくだらせるものは何もないということ。また、絶対的な、不変の、全面的な謙遜が、人に対するときだけでなく、神に近づいて祈るときにもつねに基本的姿勢でなければならないということ。そして、謙遜と心のへりくだりのないまま神を信じ、神に近づき、神の愛にとどまろうとするのは、目なしで見ようとするのと同じ、あるいは呼吸なしで生きようとするのと同じだということ。

兄弟の皆さん。私たちは高ぶりのなかに古い「私」がずっと残したままであるのに、神の祝福と豊かさを所有することを求めて、信仰を持つことのほうにあまりにも多くの労力を費やすという間違いを犯してきたのではないのでしょうか。信仰を持てるはずがありません。進む方向を変えましょう。まず第一に神の力強い御手の下に自分を低くすることを追い求めましょう。そうすれば、神が高くしてください。十字架、死、墓。これらはイエスのご自分を低くさせて通った、神の栄光に至る道でした。これらは私たちの道でもあります。ただひとつ、キリストとともにへりくだり、キリストのようにへりくだることだけを願い、それだけをひたすらに祈り求めようではありませんか。神と人との前に私たちの身を低くさせることのできるあらゆるものを、喜んで受け入れようではありませんか。ただこれだけが神の栄光に至る道なのですから。

あなたは質問したいと思っておられるかもしれまけん。私は前に、祝福された経験をもつ人たちや、他の人に祝福をもたらす道具として用いられている人たちが、謙遜に欠けていることがあると書きました。そこで、人からの栄誉ばかりを求めていることが明らかである彼らが、真実な信仰、ときには力強い信仰をさえ持っているということ、これは証明しているのではないのでしょうか、と質問なさることでしょう。

ふたつ以上の解答が考えられます。けれども、いまの文脈では原則的に次のような解答になるでしょう。すなわち、彼らはじっさいに信仰の量りを持っています。その量りに応じて、彼らの上に特別な賜物が与えられ、それが他の人にもたらす祝福になっています。ところが、まさにその祝福における彼らの信仰のわざにとって、彼らの謙遜の欠如が障壁となっているのです。祝福が、内容の伴わない一時的なものにすぎない

ことがよくあります。その理由は、彼らが神にすべてになっていただく道へと続く「無に等しい者」になっていないから、ただそれだけです。謙遜が深まるなら、疑いようもなく、祝福も深まり、ますます満ちあふれます。聖霊は彼らの内で力ある御霊として働かれるだけでなく、恵みの満ち満ちたさまで、とくに謙遜の満ち満ちたさまで、彼らの内に住まわれ、彼らを通して回心者にご自身を現してくださいませ。そして、今ではほとんど見られることのない、力ときよさに富んだ揺るがない生き方を彼らを通じて御霊が示してくださいませなのです。

「あなたがたはお互いからの栄誉を受け入れていて、どうして信じることができようか。」兄弟の皆さん！ 神からの栄誉の追求だけにあなたの身を捧げるのでなければ、人からの栄誉を受けたいという渴望から、またそれが得られないときに来る感傷、痛み、怒りから癒されることはありません。いっさいの栄光をもっておられる神からの栄誉をあなたにとってのすべてとしようではありませんか。人の栄誉からも「私」の栄誉からも解放され、自らが無に等しい者であることに満足と喜びを見出すようになるでしょう。無に等しい者であるというこのことから、あなたは信仰において力強く成長し、神に栄光を返すようになり、あなたが神の御前に深い謙遜の内に沈められるとき、ますます神は近くあってくださって、あなたの信仰のあらゆる望みをかなえてくださいます。

(十) 謙遜と「私」に死ぬこと

「彼はご自分を低くして、死に至るまで従順になられた」ピリピニ・八

謙遜は死へと続く道です。なぜなら、死において謙遜はその完全性を究極のかたちで証明するからです。謙遜は花であり、「私」の死によって果実が完成します。イエスは死に至るまで従順であられ、そのことによって私たちも歩まなければならない道を開かれました。キリストがご自分を究極まで神に明け渡したことを証明する方法は、あるいは人間的な性質を手放して神の栄光に届く道は、死ぬことしかありませんでした。私たちも同じです。必然的に、謙遜は私たちを「私」の死へと導きます。それによって、私たちがどれほど謙遜を極め、どれほど自分自身を神に全面的にゆだねてきたかが証明されます。それによってのみ、私たちは墮落した性質から解放され、神のいのちに導く道を見出します。その道の先にはまったく新しい性質が生まれます。謙遜は、その新しい性質にとっての呼吸であり、喜びです。

私たちが今まで話してきたのは、イエスが弟子たちにご自分の復活のいのちを吹き込んだとき、つまり、栄光を受け王座に着かれた柔和な方が、聖霊が下ることによって彼らの内に住まうために、ご自身天から来られたときに、イエスが弟子たちのために何をしてくださったかについてです。イエスがそうする力を勝ち取られたのは、死を通じてなのです。イエスが分け与えてくださったいのちは、その奥深い本質において、死から生まれ出たいのちであり、死に明け渡したいのちであり、死を通じて勝ち取られたいのちです。弟子たちの内に住まうために来られた方は、ご自身がひとたび死なれた方、そして今は永遠に生きておられる方です。イエスのいのち、イエスの人格、イエスの臨在に、死のしるしと、死から生み出されたいのちのしるしがあります。弟子たちの内にあったいのちにも、死のしるしが附されていました。死の御霊、死んでおられる方の御霊がたましいの内に住まい、働かれるときにのみ、御霊のいのちの力を知ることができるのです。主イエスの死にあずかる者であること、またイエスの真実な弟子であることを示す第一のたいせつなしるしは、謙遜です。謙遜だけが完全な死に導きます。そして、死だけが謙遜を完全にします。この二点の理由から、謙遜と死は本質的にひとつのものです。謙遜はつぼみです。死において果実が完熟します。

謙遜は完全な死へと導きます。謙遜とは「私」を手放し、神の御前に完全に無に等

しい者であると認めることを意味します。イエスはご自分を低くされ、死に至るまで従順になりました。その死において、イエスはご自分の意志を神のみこころに委ねたことを究極のかたちで完全に証明しました。その死において、イエスはさかずきを飲むまいとする生まれながらの「私」を手放しました。イエスは私たちの人間的な性質と結合してたいのちを手放しました。イエスは「私」に対して死なれ、彼を試みる罪に対しても死なれました。そうして、人間として、イエスは神の完全ないのちに入られました。イエスには、ご自分をただ神のみこころだけを行い、そのゆえに苦しみを受けるしもべとしか思わずにいるような、無限の謙遜がありました。もしそれがなければ、イエスがわざわざ死なれたはずがありません。

以上から、よく言われる質問に答えることができます。とはいえ、その意味をはっきりと理解していただけることはほとんどありませんが。すなわち、どのようにして「私」に死ぬことができるのか、という質問です。「私」に死ぬことは、あなたの仕事ではありません。それは神の側の仕事です。キリストにあって、あなたは罪に対していま死んでいます。あなたの内にあるいのちは、すでに死と復活の過程を通りました。あなたはじっさいに自分が罪に対して死んでいることを確信できます。しかし、この死の力があなたの心と行動に十分に現れるかどうかは、聖霊がキリストの死の力をどれほど分け与えてくださるかによります。そこで、次のような教えが必要となるのです。すなわち、もしあなたがキリストの死にあずかる完全な交わりに入って、「私」からの完全な解放を体験したいのであれば、自分を低くしなさい。これがたったひとつのあなたの義務です。神の御前にあなたがまったく無力であることを認めてください。あなたを生かすも殺すも、自力では不可能であるという事実を心から認めてください。あなたがまったく無に等しい者であるという事実を思いを沈めてください。柔和、忍耐強さ、より頼む心をもって、自分を神に明け渡してください。一つひとつの屈辱を受け入れてください。あなたを試み、苦しめる者を、あなたをへりくだらせるための恵みの機会と見なしてください。身近な人の前にあなたがへりくだることのできるすべての機会を、神の御前に謙遜の内にとどまるために用いてください。そのようなへりくだりは、神の御前に、あなたがまったき心で謙遜を願っていることの証明であり、謙遜を願い求める最高の祈りそのものであり、神の力強い恵みのみわざを受ける準備です。神の聖霊の力強い励ましによって、神がキリストをあなたの内にあますところなく啓示してくださ

るとき、神がそのようにへりくだりを受け入れてくださいます。その結果、しもべの姿のキリストがあなたの内にほんとうに形造られ、あなたの心に住んでくださいます。それが、私たちがキリストにあって死んでいる者であることを十分に完全に体験するための、完全な死へと導かれる謙遜の道です。

それゆえ、次のことが言えます。ただこの死だけが完全な謙遜へと導く、と。ああ、多くの人々が犯す間違いに気をつけてください。喜んで謙遜になりたいと願っているものの、謙遜になり過ぎることを恐れるという間違いに。人々は真実な謙遜とは何であり、また何をすることであるかについて、多くの留保と制限を設け、多くの言い訳と疑念を抱いています。そのため、謙遜に身を捧げることにためらいを感じています。そのことに気をつけてください。自分を低くするのは「死に至るまで」です。「私」に死ぬことにおいてこそ、謙遜が完成します。現実には恵みがますます豊かにされる経験をするにせよ、ほんとうにきよめにおいて進歩があるにせよ、じっさいにイエスの姿にますます似せられていくにせよ、そのすべての根本に「私」の死がなければなりません。それこそが神と人との前で、私たちの心と生活習慣にそれらがあることを証明するのです。悲しいことに、どれだけ優しく好意的に見ても、「私」から出ているものが明らかにそのまま残っているにもかかわらず、死によるいのちについて、また御霊によって歩むことについて語ることは可能です。「私」の死が成し遂げられたという確実な証拠は、自分の評判を求めず、自分をからにしてしもべの形をとる謙遜しかありません。柔和でへりくだった、優しく穏和な神の小羊の謙遜が見られず、それをほとんど求めてもいないにもかかわらず、あざけられ拒絶されたイエスとの交わりについて、またイエスの十字架を負うことについて、雄弁に率直に語ることは可能です。キリストをその両方の姿で受け取ることを求めようではありませんか。キリストにあってはそのふたつは分離できません。それらは私たちの内にもなければなりません。

私たちが自力でそのわざをしなければならぬとすれば、なんという絶望的な仕事でしょうか！ 自然が自然を克服することはまったく不可能です。たとえ恵みの助けがあってもです。「私」が「私」を追い出すことはまったく不可能です。たとえ一新された人であってもです。神をほめたたえます！ そのわざはすでに成し遂げられ、完結し、永遠に完成しました。イエスの死が、ただ一度また永遠に、私たちにとって「私」に対する死となりました。そして、ただ一度また永遠に、イエスが至聖所に入られたことに

よって、イエスの昇天が私たちに聖霊を与え、力をもって、死によるいのちの力を私たちに吹き込み、その力を私たちのものとさせました。謙遜の追求と実践において、たましいがイエスの足跡に従うとき、次第にもっと何かが必要だという意識が目覚め、その願いと望みが呼び覚まされ、その信仰が強められ、まことに満ち満ちているイエスの霊を見上げ、求め、受け取ることを学ぶようになります。その霊が、力に満たされて「私」と罪に対するイエスの死の状態を日々維持することができ、謙遜の精神を私たちの生活に充満させることができるのです。(章末のノート三参照)

「イエス・キリストへのバプテスマを受けた私たちは皆、キリストの死にあずかるバプテスマを受けたことを知らないのか。自分のことを、罪に対しては死んだが、キリスト・イエスにあって神に対して生きている者と考えなさい。死から生き返った者として自分を神に捧げなさい。」クリスチャンの自己認識は、キリストの死に生き生きとした活力を吹き込む精神に全面的に満たされ、特徴づけられるべきです。彼はつねに自分をキリストにあって死んだ者として、またキリストにあって死からよみがえり、主イエスの死をその身に帯びている者として神に捧げなければなりません。彼のいのちはふたつのしるしを帯びています。その根は、真実の謙遜によって深く伸び、罪と「私」の死ぬ場所であるイエスの墓に届いています。そのかしらは、復活の力によってイエスがおられる天にまで高く上げられています。

信者の皆さん。イエスの死といのちが私のものであると、信仰をもって主張してください。イエスの墓に入って「私」からの解放と自力のわざからの解放を得てください。神の安息を得てください。キリストがご自分の霊を父に委ねたのですから、あなたもキリストとともにへりくだって、日ごとに自力を放棄して神に完全により頼むところまで降りてください。神があなたを起き上がらせ、あなたを高めてくださいます。毎朝、深く深くあなたを無にして、イエスの墓へと沈められてください。そうすれば、毎日、イエスのいのちがあなたの内に現されます。喜ばしい、愛おしい、平穏な、幸せな謙遜を、キリストの死にあずかるバプテスマの証印としてください。それはあなたがじっさいに所有権を主張したものです。「ひとつの供え物によって彼は、聖別される人々を永遠に全うした。」キリストの辱めに入っていくたましいは、キリストの内に、「私」を死んだ者とする力があることを見出します。キリストから学び受け取った者が、キリストの内に、謙遜と柔和とお互いを愛をもって耐え忍ぶ心で歩む力を見出すのと同様です。死

によるいのちは、キリストがそうであったように、柔和と謙遜のなかに見られるのです。

ノート三 「私」に死ぬことは、つねに「私」の影響下にある者にとって、自然の力でいくら能動的に抵抗しようとしても、それによって達せられることは不可能です。「私」に死ぬひとつの本物の方法は、忍耐、柔和、謙遜、神への献身です。これが「私」に死ぬことの真理であり完成です。……というのも、もし私が、神の小羊とはどのような意味ですかと尋ねれば、それは忍耐、柔和、謙遜、神への献身の完成であり、それを意味すると答えなければならないのではないのでしょうか。したがって、これらの徳を願い求め、そこに信仰をもつことは、キリストの適用であり、あなた自身をキリストに捧げること、キリストに対する信仰の完成である、と言わなければならないのではないのでしょうか。それから、この忍耐、柔和、謙遜、神への献身に心を沈めようとする性向は、あなたのすべてを、あなたが墮落したアダムから受け継いだすべての性質を本当に手放すことであるので、キリストに従うという選択肢だけを完全に残します。それは、キリストにある最も高潔な信仰の行動なのです。キリストはこれらの徳のなか以外にどこにもおられません。それらの徳があるとき、キリストはご自分の王国におられます。これこそをあなたが従う「キリスト」にしてください。

神の愛の御霊は、墮落した被造物がそのままでいても彼の内に何かを生み出すなどということはできません。被造物が神の力とあわれみに対する忍耐強い、謙遜な献身のもとで「私」にまったく死ぬことを願い、選ぶときにこそ、御霊が働かれます。「柔和で謙遜で忍耐強く苦しみにあわれた神の小羊の好意と仲介によって、私はすべての救いを求めます。神の小羊おひとりが私のたましいにこの天よりの徳を祝福のうちに生まれさせる御力をもっておられます。」柔和で謙遜で忍耐強く献身した神の小羊が私たちのたましいに形造られるときにのみ、またそのことによってのみ、救いが可能になります。神の小羊が私たちのたましいの内にキリストご自身の柔和、謙遜、神への完全な献身をありありと生まれさせるとき、その日が私たちのたましいに愛の御霊が生まれる日となります。愛の御霊をいただくときにはいつでも、私たちは今まで平安や喜びと呼んでいたものの記憶が消し飛んでしまうほどの、神にあるまったき平安と喜びがたましいに訪れるのを祝い楽しむことでしょう。

神へのこの道は確実です。この確実さは私たちの救い主のふたつの特性に根ざし

ています。①キリストは神の小羊であり、たましいの柔和と謙遜いっさいの根源である方であるということ。②キリストは天の光であり、永遠の性質を祝福し、それを天の御国に入れる方であるということ。私たちがたましいに憩いを得るために喜んで柔和で謙遜な神への献身をしようとするとき、神の光であり天の光であるキリストが喜んで私たちの内側に来てくださり、私たちの闇を光に変え、決して終わることのない神の王国、愛の王国を私たちの内側で始めてくださいます。 『すべてを神のために』参照。(この書は全体にわたって注意深く研究する価値があります。神の御前にへりくだって心を深く沈め続けることが、人間の側から「私」に死ぬための唯一の方法であることを明快に説いています。)

(十一) 謙遜と幸福

「したがって、私はむしろひととき喜んで自分の弱さを誇りとしよう。それはキリストの強さが私の上にとどまるためである。そのため、私は弱さを喜んでいる。私が弱いとき、私は強いからである。」第二コリント一・九、一〇

その啓示のあまりのすばらしさのゆえに、パウロが自分を高くすることのないように、彼をへりくだらせるために肉体のとげが送られました。パウロは最初、それが取り去られることを願って、主に三度、これを取ってくださいと懇願しました。答えは、試練は祝福である、というものでした。それがもたらす弱さと謙遜のなかに、主の恵みと強さがますます現されるための祝福である、と。ただちにパウロは試練に対する態度を改め、新しい段階に入りました。それを単純に耐え忍ぶのではなく、ひととき喜んで栄誉としました。解放を求めるのではなく、喜びを見出しました。パウロは、謙遜の場所が祝福、力、喜びの場所であると学びました。

パウロが謙遜を追及するに際してこのふたつの段階があったことをほとんどのクリスチャンが見過ごしています。最初、彼は自分をへりくだらせるあらゆる機会に対して恐れを抱き、逃げ出そうとし、解放を求めました。彼はまだ、どんな代価を払ってでも謙遜を求めるということを学んでいませんでした。彼は謙遜になりなさいという戒めを受け入れ、それに従うよう努めていましたが、その努力は徒労に終わるだけでした。彼は謙遜を祈り求めています。何度も、熱心に。ところが、心の奥底では、彼をへりくだらせる当のものから逃れることを、はっきりと言葉にはしないまでも、謙遜よりも祈り求めています。神の小羊の美しさや天の喜びに関しては、すべてを売り払ってでも手に入れたいと願っていましたが、謙遜のともなう愛に関しては、まだそれほどまでに願っていませんでした。謙遜を追求し、それを祈り求めています。まだそこいらかの重荷の感覚や束縛の感覚がありました。自分を低くすることが、まだ自然とにじみ出る本質的に謙遜な生き方や人格になっていませんでした。それがまだ楽しみや唯一の喜びになっていませんでした。まだこう言うことができませんでした。「私はひととき喜んで自分の弱さを誇りとしよう。私をへりくだらせるすべてのものを喜ぼう。」

しかし、私たちはこのように言える段階を望めるのでしょうか。間違いなく、望めます。では、何が私たちをそこに導くのでしょうか。パウロをそこに導いたものが、つまり

主イエスの新しい啓示が、私たちを導きます。神の臨在のほかに、「私」の正体をさらし、「私」を追放するものではありません。パウロはさらに明晰な洞察を得なければなりませんでした。イエスの臨在こそが、私たちのほうに何かを求めようとするあらゆる欲望を消し去ってくれるという真理を知らなければなりませんでした。また、イエスの臨在こそが、あらゆる恥辱に対して、イエスの満ち満ちた現れのために私たちを整えてくれるものとして喜ぶことができるようにするという深遠な真理を知らなければなりませんでした。私たちが恥辱を受けるとき、イエスの臨在と御力を経験します。その恥辱が、いと高き祝福として謙遜を選び取るように私たちを導きます。パウロの物語が教えている教訓を学ぼうではありませんか。

高みに達した信者であっても、有名な教師であっても、天の経験をした人であっても、弱さを喜んで誇りとする、完全な謙遜の教訓を十分には学んでいないかもしれません。パウロに例を見ることができます。高ぶりに陥らせる危険がすぐそこまで迫っていました。パウロはまだ、無に等しい者になるとはどういうことかを完全には理解していませんでした。彼の内でただキリストおひとりが生きようになるために死ぬということ、自分を低くさせるあらゆるものを喜ぶということ、理解していませんでした。自分をむなしくすることによる主へのまったき従順が、彼が学ばなければならない最もたいせつな教訓であるようでした。それは、自分の弱さを誇り、神にすべてになっただけのためでした。

信者が学ぶべき最も高尚な教訓は、謙遜です。ああ、きよめにおいて高みに達することを目指すクリスチャンの皆さん、このことをよく覚えてくださいますように！ はげしいきよめの体験や、燃えるような熱心や、天に届くような経験があるかもしれませんが、それが主の特別な取り計らいによって守られているのでなければ、無意識のうちに自己賞賛が入り込んでいる可能性があります。次の教訓を学ぼうではありませんか。すなわち、最も高いきよめとは、最も深い謙遜です。そして、謙遜はそれ自身から来るのではなく、私たちの忠実な主と、主の忠実なしもべが、特別に取り扱ってくださるかどうかが問題になっているのだということを覚えようではありませんか。

この体験の光のもとに私たちの生き方を見ようではありませんか。私たちが喜んで弱さを誇りとしているかどうか、パウロがそうしたように、侮辱にあっても、欠乏にあっ

でも、困窮にあっても、それらを喜びとしているかどうかを確かめようではありませんか。そうです。正しい批判も正しくない批判も、友人からの非難も敵からの非難も、侮辱も、困難も、ほかの人々がもってくる厄介事も、なによりもまず、イエスこそが私たちにとってすべてであること、私たち自身の喜びや名誉は無にすぎないこと、そして、恥辱は私たちが喜びを見出す真理のひとつに数えられているということを証明する機会であるとみなすべきなのです。そのことを学んできたかどうかを自問しようではありませんか。「私」から解放され、私たちが何を言われようと何をされようと、イエスこそがすべてであるという思いのなかにそのいっさいが消え、一掃されるという経験は、ほんとうに祝福された、天からの深い幸福です。

パウロを顧みてくださった方は私たちをも顧みてくださるのですから、その方を信頼しようではありませんか。パウロには特別な修練と特別な戒めが必要でした。パウロは天で聞いた、言葉で表現することのできないほどの素晴らしい事柄を体験しました。しかし、それよりもはるかに尊いものが、弱さと低さを誇ることであるということを経験するために、特別な修練と戒めが必要でした。私たちにもそれが必要です。あまりにも必要です。パウロを気遣った方は私たちをも気遣ってください。神は「私たちが自分を高くすることのないように」ねたむほどの愛の気遣いによって私たちを見つめておられます。私たちが高ぶっているとき、神は私たちの悪を明らかにし、私たちを解放しようとなさいます。試みと弱さと困難のなかで、神は私たちを低くされます。それは、神の恵みがすべてであることを私たちが学び、私たちを低くし、低さを維持する当のものに私たちが喜びを見出すようになるまで続きます。神の強さは私たちの弱さの内に完全に現れます。神の臨在は私たちが空となるときに内側を満たしてあふれさせます。それが一度も失敗をみる必要のない謙遜の奥義です。神が私たちの内に、また私たちを通して働いてくださるものをくまなく見渡すとき、パウロのようにこう言うことができます。「私がおもだった使徒たちに劣るところはない。私自身は無に等しい者であるが。」恥辱は彼をほんとうの謙遜に導きました。へりくだりに至らせるあらゆるものを喜び、誇り、楽しむようになりました。

「私はむしろひととき喜んで自分の弱さを誇りとしよう。それはキリストの強さが私の上にとどまるためである。そのため、私は弱さを喜んでいいる。」謙遜な人は喜びにとどまるための奥義を学んでいます。自分の弱さをひしひしと感ずるほど、ますます低み

に沈んでいきます。自分の前に立ちはだかる恥辱が大きいほど、ますますキリストの力と臨在が彼の所有となります。そして、ついにこう言います。「私は無に等しい者です。」主のことばがさらに深い喜びをもたらします。「わたしの恵みはあなたに十分である。」

もう一度、すべての教訓をふたつに要約しなければならない必要性を私は感じています。高ぶりの危険は私たちが思うよりも大きくて、身近にあります。そして、謙遜の恵みもまた同様です。

高ぶりの危険は私たちが思うよりも大きくて、身近にあるのです。ことに、天の高みに至る経験をするときには、説教者が驚くべき霊的な真理を語って聴衆を彼の語ることばに釘付けにすると、賜物を持った教師が聖なる講壇から天からのいのちの奥義を説き明かすとき、クリスチャンが祝福に満ちた経験を証しするとき、宣教者が勝利のうちに歩み、多くの人々を喜びで満たす祝福となっているとき、彼らが隠れた無意識の危険にさらされていることをだれも知りません。パウロは知らず知らずのうちに危険にさらされていました。イエスがパウロのためにしてくださったことは、私たちの教訓のために書かれています。私たちの危険を知り、私たちの唯一の避け所を知るためです。きよめの教師とかきよめの専門家とか言われることのある人は、じっさいには「私」が全然なくなっています。自分の語っていることを自分で実行していません。与えられた祝福がその人にへりくだりや優しさという実をもたらしていません。これ以上は言わないでおきましょう。私たちの信頼するイエスこそが、私たちにへりくだらせることができになります。

そうです。謙遜の恵みもまた、私たちが思うよりも大きくて身近にあります。イエスの謙遜は私たちの救いであり、イエスご自身が私たちの謙遜です。私たちの謙遜はイエスの気遣い、イエスの働きなのです。彼の恵みは私たちに十分です。高ぶりの誘惑にあうときにも、そう言えます。彼の強さは私たちの弱さの中で完全なものになります。弱くされること、低くされること、無に等しい者とされることを選び取ろうではありませんか。謙遜を私たちの楽しみ、喜びとしようではありませんか。私たちに低くし、低さを維持させるすべてのもののなかにあって、自分の弱さを喜んで誇りとし、弱さを喜ぼうではありませんか。キリストはご自分を低くされました。それゆえ、神は彼を高くされま

した。キリストは私たちが低くされ、低さを維持されます。心から従い、信頼と楽しみをもって、へりくだりに至らせるすべてのものを受け入れようではありませんか。キリストの力が私たちの上にとどまるためです。最も深い謙遜が、最も真実な幸福の奥義です。何ものもその喜びを破壊することはできません。神はそのことを理解させてくださいます。

(十二章) 謙遜と高く上げられること

「自分を低くする者が高く上げられる。」ルカ一四・一一、一八・一四

「神はへりくだる者に恵みを与える。主の目の前にへりくだりなさい。そうすれば主があなたを高く上げてくださる。」ヤコブ四・一〇

「ですから、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神がちょうどよい時にあなたを高く上げられる。」第一ペテロ五・六

ちょうど昨日、私は質問をしました。どのようにして、私はこの高ぶりを克服することができるのでしょうか。答えはシンプルです。必要なことは二点です。神があなたの仕事であるとおっしゃったことをしましゅう——「自分を低くしなさい。」神がご自分の仕事であるとおっしゃったことを必ずしていただけると信頼しましゅう——「神はあなたを高くしてくださる。」

命令ははっきりしています。「自分を低くしなさい。」生まれながらの性質である高ぶりを克服し追い出すことがあなたの仕事であると言っているのではありません。また、聖なるイエスのへりくだりというご性質をあなたの内側に形づくりなさいと言っているのではありません。それらは神の側の仕事です。高く上げられることの本質は、愛する御子のほんとうの似姿へと神があなたを引き上げてくださることなのです。その命令が言おうとしていることはこうです。「神と人との前に自分を低くする機会を逃さないようにしなさい。」 あなたのうちにすでに恵みが働いていると信じる信仰によって、もうそこまで来ている勝利をもたらす恵みがますます大きくなるという保証のなかで、どんなときにも良心が心と思いの高ぶりを光で照らし出すことのできるようになるまで、あらゆる努力にもかかわらず失敗や挫折があるかもしれませんが、この不変の命令を辛抱強く固守してください。「自分を低くしなさい。」神があなたに謙遜の必要性を思い起こさせるため、また謙遜になるために有益なあらゆるものを与えるとき、それが内側からのものであれ外側からのものであれ、友人からであれ敵からであれ、自然のものであれ恵みであれ、どんなものでも感謝をもって受け入れてください。謙遜を、徳の母であるとじっさいに考えてください。神の御前にあなたがしなければならない第一の義務であると考えてください。たましいにとって唯一の永続的な避け所

あると考えてください。そして、すべての祝福の源泉である謙遜をあなたの心の基礎としてください。次の約束は、神からの確かな約束です。「自分を低くする者は高く上げられる。」神がしなさいとおっしゃっているのはただひとつであることを確認してください。「自分を低くしなさい。」神が行うのはご自分が約束しているひとつのことであることを神ご自身も確認するでしょう。神はもっと大きな恵みを与えてくださいます。あなたをちょうどよいときに高く上げてくださいます。

神が人を取り扱う方法はすべて、ふたつの段階で特徴付けられます。はじめは準備の段階です。命令と約束を与え、それを行おうとする努力と挫折、失敗と部分的な成功の入り混じった経験のなかで、もっと良いものが与えられるという聖なる期待が呼び覚まされ、そのことによって人をもっと高い段階へと訓練し修練します。その次に、成就の段階があります。信仰が約束を相続し、何度求めても無駄になってきたものを喜ぶ段階です。この法則はクリスチャンライフのあらゆる部分にも、それぞれの徳を追求するに際しても良い影響を与えます。なぜなら、それは物事の本質に根ざしているからです。私たちの贖いに関するあらゆるものにおいて、是が非でも神に優先権を握っていただかなければなりません。そうやってはじめて人の出番があります。従順と獲得をめざした努力のすえに、人は自分の無力さを学ばなければなりません。自力で「私」に死ぬことが不可能であることに失望しなければなりません。それから、神から自発的に、理性的に、「終わり」を、つまり人が知らないうちに最初に受け取っていたものの完了を、受け取ることができるようになります。ですから、人が神を正しく知る前から、あるいは神の目的が何であるかを十分に理解する前から、神は「最初」である方でしたが、「終わり」になっていただき、すべてにおいてすべてになっていただくことを切に願い、歓迎するようになります。

謙遜の追及においてもこれと同じことが言えます。クリスチャン一人ひとりに、神ご自身の御座から命令が来ます。「自分を低くしなさい。」熱心に聞き従おうとするなら、報いがあります。そうです。その報酬は、二点の痛ましい発見です。第一は、高ぶり、つまり神に絶対的に従うために、自分自身を無に等しい者とみなしたり、またそう扱われたりすることに対してできれば避けたいという気持ちが、それまでまったく自覚していなかったほど深く存在するという点です。第二は、隠れた魔物を打ち倒すために、力を尽くして努力をしても、心を尽くして神の助けを祈り求めても、まったく無益で

あるという点です。いま神に期待を置くことを学び、内側にある高ぶりの力が押し寄せるにもかかわらず、神と人との前にへりくだりの行動を忍耐強く続けることを学ぶ人は幸いです。私たちは人間界の法則を知っています。すなわち、行動が習慣を作り、習慣が性向を養い、性向が意志を形成し、正しく形成された意志が人格であるということです。恵みの働きもこれと異なるものではありません。忍耐強く繰り返された行動が、習慣と性向を獲得し、それらが意志を強めるにつれて、意志と行動に働きかける方が大能の力と御霊をもって来てくださいます。高ぶりの心を悔いた聖徒がみずからを低くして神の御前に何度も自分を投げ出すなら、その報酬は謙遜な心という「ますます大きな恵み」です。そこにおいてイエスの御霊が征服し、新しい性質を成熟させてくださいました。いまや柔和でへりくだった方であるイエスが永遠にとどまってくださいます。

主の目の前に自分を低くしてください。そうすれば、主があなたを高く上げてくださいます。では、高く上げられる栄誉はどこにあるのでしょうか。被造物にとって最高の栄誉は、神の栄光を受け取り、楽しみ、現すための純粋な器となることにあります。それが可能になるのは、神にすべてになっていただくために、被造物がみずから進んで無に等しい者となるときだけです。水はいつでも、まずはじめに最も低い場所に下りません。人が神の御前でへりくだればへりくだるほど、また空になれば空になるほど、ますます速やかに神の栄光が流れ込み、ますます豊かに神の栄光に満たされます。神が約束された高く上げられる栄誉は、神ご自身を離れた外的なことがらではありません。それはありえません。神が与えなければならぬもの、あるいは与えることのできるものは、すべて神ご自身から出ているものです。すなわち神ご自身です。神ご自身を完全な所有として与えてくださいます。高く上げられる栄誉は、地上の賞のように、報酬に値する行為と必然的な結びつきのない恣意的なものではありません。そうではなく、その栄誉は本質的に私たちがへりくだったことによる効果と結果です。それは、神の内住による謙遜という賜物です。神の内住を十分に受けるにふさわしい者となるために、神の小羊の謙遜に似せられること、その謙遜を所有することです。

自分を低くする者は高くされます。イエスご自身がこのことばが真理であることの証明です。イエスご自身がこのことばが私たちに実現することの確実な保証です。イエスのくびきを負い、イエスから学ぼうではありませんか。イエスは柔和で謙遜な心を

もっておられるのですから。イエスが私たちに身をかがめてくださったように、私たちもイエスに身をかがめさえするなら、イエスはふたたび私たち一人ひとりに身をかがめてくださるので、私たちがイエスと共に背負うくびきは不当な重さではないことがわかるでしょう。イエスの受けた恥辱に共にあずかる交わりが深くなり、自分を低くしたり人からの恥辱に耐えたりするにつれて、私たちはそうした機会をイエスの昇天の御霊、「神の御霊、栄光の御霊」が私たちの上にとどまることであると思えるようになります。栄光のキリストの臨在と力は、謙遜な霊をもつ人々のところに来ます。神がふたたび私たちの内に正しい場所をとることができるなら、神は私たちを引き上げます。神の栄光をあなたの関心事とし、自分を低くしてください。神があなたの栄光をご自身の関心事とし、あなたの謙遜を完成させ、あなたの永遠のいのちである御子の御霊が内側で息づいてくださいます。すみずみまで充満した神のいのちがあなたを所有するにつれて、「私」のための考えや願望をもたず無に等しい者となることほど自然で甘美なものはほかになくなります。なぜなら、すべてを満たす方がすべてを占領してくださるからです。「私はひととき喜んで自分の弱さを誇りとしよう。それはキリストの強さが私の上にとどまるためである。」

兄弟の皆さん。私たちの献身と信仰を、聖めの追求にほとんど向けてこなかった理由をここに見出すことができないでしょうか。信仰の名のもとで働きが行なわれたのは、「私」とその力によってでした。神に助けを求めたのは、「私」とその幸福のためでした。無意識のうちにたましいが喜びを見出していたのが「私」とその聖めにおいてであったことは、言い逃れようもない真実です。謙遜、それも絶対的な、永遠の、キリストに似た謙遜と、「私」の消滅が、神と人と共にある私たちの生き方全体に充満し、キリストのしるしをつけることこそが、追求すべき聖めの生き方の最も本質的な要素であることを、私たちは今まで知りませんでした。

「私」が消滅するのは、私が神の所有となるときだけです。太陽の光の高さと広さと栄光の中にあつてこそ、光線の中でただようちりの小ささを見ることができます。同じように、謙遜とは、神の臨在の中に私たちの場所を定め、神の愛という太陽の光の中にとどまるちりとなること、それ以外の何ものでもありません。

「神はなんと素晴らしい方でしょうか！ 私はなんと小さいことでしょうか！ あふれん

ばかりの愛の中で私は失われ、掃き出されました！ 神だけがおられ、私はなくなりました。」

謙遜になること、神の臨在の中で無に等しい者になることが、最高の到達であり、クリスチャンライフの最も満ち満ちた祝福であると信じるように、神が教えてくださいますように。神はこう告げています。「わたしは高く聖なる場所に住み、罪を悔いてへりくだった霊を持つ人と共に住む。」これを私たちの分け前としてください！

「ああ、ますます空になり、ますます低くなり、卑しく、だれにも気づかれず、だれにも知られない者になること。そして、神の用いる器として、ますます聖くなって、キリストで満たされる。キリストだけに！」

ノート(四) 奥義の中の奥義とは、謙遜という真実な祈りのたましいです。――心の霊が新たにされるまで、すべての地上的な願望が空っぽになるまで、そして日夜、神を求めて飢え渴き、祈りの真実な霊が形造られるまで、そのときまでは、私たちの祈りは、多かれ少なかれ、学生に授業をするようなものにすぎません。つまり、それらを見捨てる勇気がないからというだけの理由で、とりあえず言っているだけです。しかし、気を落とさないでください。以下のアドバイスを聞いてください。そうすれば、教会に行くときに、あなたの心で感じているよりも高尚なことばで賛美や祈りが行なわれたとしても、あなたが口先だけの偽善者になるという危険に陥らずにすむかもしれません。こうしてください。取税人が神殿に行ったときのような態度で教会に行くのです。内面的な心の持ち方は、取税人がことばと態度で表した姿勢にならってください。うつむいて、こぼれただけでした。「神よ、罪人の私をあわれんでください。」この心の姿勢と状態を変わずに維持してください。少なくとも、そう願ってください。あなたの口から出る一つひとつの祈りがきよめられるようになります。何かを読まれたり、歌われたり、祈られたりするとき、そのことばが自分の心の思いよりも高尚なものであったとしても、あなたがそれを取税人の精神をさらに深く自分のものとする機会とするなら、あなたは助けを得て、大いに祝福されます。それらの祈りや賛美があなたよりももっと素晴らしい心を持った人のためのものでしかないように感じられるからです。

友よ、これが奥義の中の奥義です。あなたが蒔かなかったものを刈り取る助けになります。あなたのたましいの中で恵みがあふれ続ける源になります。なぜなら、あなた

の内側で湧き起こるあらゆるものも、外側で起こるあらゆるものも、この謙遜な心の状態を練り上げ、かき立てるなら、あなたにとって本当に有益なものになるからです。謙遜なたましいにとって無駄も無益もありません。いつでも神にあって成長し続けます。わが身に降りかかるものすべてが、天からのしずくのようなものです。ですから、この謙遜な姿勢で沈黙してください。あらゆる良いものが伴います。それは天からの水です。その水が墮落したたましいの炎を神による柔和な生き方へと変え、神と人に対する愛に火をつけるための油を創造します。それゆえ、それを身にまわってください。あなたがいつも身につける着物としてください。腰を締める帯としてください。その精神の中からのみ息をしてください。その目をもってのみ見るようにしてください。その耳をもってのみ聞くようにしてください。そうするなら、あなたが教会の中にも外にも、神の賛美を聞いていても人やこの世から不正な扱いを受けたとしても、すべてがあなたの徳を建て上げる糧となり、神のいのちによって成長するための助けとなるでしょう。（『祈りの霊』第二集 百二ページ）

<謙遜を求める祈り>

ここにすべての人を真理に向かっているかどうかをためす確実な試金石があります。それはこうです。一ヶ月間だけ、この世から退き、すべての会話を遮断してください。書くことも、読むことも、自分と対話することもやめてください。そのようなあなたの心と意思の働きをすべて止めてください。そしてあなたの心のいっさいを尽くして、この一ヶ月間、以下の神への祈りをできる限り継続してください。ひざまずいて何度も祈ってください。あるいは座っていても、歩いていても、立っていても、いつでも内心でこのひとつの祈りを切に願い、熱心に祈ってください。「神はすぐれて良い方なので、どのような種類の高ぶりも、どのような形の高ぶりも、どのような程度の高ぶりも、悪霊から来たものであれ、あなた自身の墮落した性質から来たものであれ、あなたに知らせてくださり、あなたの心から取り去ってください。神があなたの内にある謙遜の最も深い奥行きと真理を目覚めさせてくださいます。その謙遜こそが、神の光と聖霊があなたの内に入ってくるのを可能にします。」あらゆる雑念を拒み、心の底からこのような祈りをもって待ち望むのです。悩みの窮地にある人が解放を求めて祈るような真実と熱心をもって。……この祈りの精神を求める真実と誠実の中で自分自身を手放すことができるなら、私は次のことを確信をもって保証します。仮にあなたがマ

グダラのマリアの二倍の悪霊を持っているとしても、すべての悪霊どもがあなたから出て行き、彼女と共に聖なるイエスの足元で愛の涙を流さざるをえなくなるでしょう。
『祈りの霊』第二集 百二四ページ